

第III章 子どもと父親



子どもの成長過程をたどるとき、母子関係のあり方が、子どもの心身の発達に大きな影響を与えることは周知の通りである。そして父子関係は、母子関係のつぎに作られる親子関係といわれる。しかし、子どもが大きくな

るにつれて、父親とのかかわりは、次第に増していき、父子関係の重要性は母子関係におとらないくらいの意味を持ち始める。この章ではそうした意味を持つ子どもと父親に焦点をあててみたいと思う。

1. 父親たちの現在

(1)父親の心の内

はじめに、現代の高校生の父親像をありのままにとらえることを試みることにした。この時期の父親といえは40代もやや後半、まだまだ働き盛りの年齢である。といっても職場での地位も安定してきて、そろそろ老後のこ

とが気になりだすところである。家庭へ帰れば、子どもの高校合格の喜びもつかの間、将来の進路をめぐって、さらに子育ての問題は深刻さを帯びがちになる。こうした父親を様々な角度から追ってみたいと思う。

まずはじめに、父親たちは、どのような人生を歩んできたのであろうか。その心境をあ

らわしているのが表17である。「これまでの人生を振り返って」の問いに、父親たちは、「時代がよかった」とは思えないし、「自分に能力があった」とも「運がよかった」とも考えられない。しかし、「家族をはじめ人間関係に恵まれ」、そうした中で、「精一杯努力だけはしてきた」つもりだという。

40代の後半といえは、戦争のまっただ中に子ども時代を過ごし、青年期を戦後の混乱の中で送った世代である。したがってまだまだ苦勞してきた世代である。そう考えると、「時代がよかった」とはいえないし、才能があったとも思えないが、「努力だけはしてきた」は、

父親の偽らざる心情のように思えてくる。

そうだとすると、現状についての肯定度はかなり高いものと予想されよう。

表18は、家族・住居・職業上の地位・収入・学歴についての7項目での満足度を、7段階で評価してもらった結果である。子どもや妻に対しての満足度はかなり高く、「とても」から「やや」までを含めると、満足している者が86%にも達する。しかし、仕事に関する項目の満足度が低下しているのが気になる。「やや」まで含めた満足度でみると、仕事上の地位で61%、現在の収入では56%と50%台に下がるし、最終学歴については47%まで落ち込む。

表17 人生を振り返って
—努力だけはしてきたつもり—

(%)

A	そう思う		どちらとも いえない	そう思う		B
	とても	まあ		まあ	とても	
家族に恵まれた	22.8	60.6	12.1	3.6	0.9	家族に恵まれなかった
	83.4			4.5		
精一杯努力した	21.9	53.4	20.6	3.5	0.6	あまり努力しなかった
	75.3			4.1		
友だちや先輩など、人間関係に恵まれた	14.1	45.0	33.1	5.9	1.9	人間関係に恵まれなかった
	59.1			7.8		
よい親に恵まれた	15.1	40.3	32.9	7.4	4.3	親に恵まれなかった
	55.4			11.7		
運がよかった	9.1	44.6	39.8	5.2	1.3	運が悪かった
	53.7			6.5		
自分に能力があった	4.0	37.1	51.0	5.7	2.2	自分に能力がなかった
	41.1			7.9		
時代がよかった	5.6	28.1	49.6	10.8	5.9	時代が悪かった
	33.7			16.7		

どうやら父親のしあわせは、職業生活や社会というより、家庭にあるように思える。

そこで、家庭生活における父親の姿を探っていくことにしよう。

表19は、父親が家庭に対して抱く不適応感や疎外感などについて、どのくらい感じる可能性があるかを尋ねた結果である。さすがに「しょっちゅう・わりとある」と答える割合はそれほど高くないが、「ときどき・たまにある」まで合わせるとほとんどの項目で、半数を超える。まずトップは「妻が口やかましすぎる」で、「しょっちゅう・わりとある」は

18%、「ときどき・たまにある」68%を含めると9割近くの父親がそうした不満を感じているし、家族に対して、「外での苦労をわかってくれない」と父親として報われていないという不満をときどき持つという父親も少なくない。また、高校生を持つ親としては、「だんだん子どもが自分の手から離れていく」といったさびしさを感じている父親も少なくない。しかし、全体としてとれば、家庭の中の父親は、それほど疎外されていないらしく、まずは、しあわせな家庭生活を送っている印象を受ける。

表18 現状についての満足度

— 家族についての満足感が高い —

(%)

項目	尺 度			な ん とも い え ない	不 満		
	と とも	か な り	や や		や や	か な り	と とも
1. 子 ども	16.3	35.0	34.8	9.9	2.8	0.8	0.4
	86.1				4.0		
2. 妻	18.6	36.9	28.0	11.2	3.5	0.8	1.0
	83.5				5.3		
3. 住む地域	11.1	30.9	35.9	13.0	7.0	1.0	1.1
	77.9				9.1		
4. 住まい	9.9	27.2	37.2	13.3	8.8	2.5	1.1
	74.3				12.4		
5. 仕事(上の地位)	4.8	21.2	35.0	28.5	7.6	1.8	1.1
	61.0				10.5		
6. 収 入	3.3	17.3	35.7	23.3	15.5	3.3	1.6
	56.3				20.4		
7. 最終学歴	6.3	17.5	23.2	26.0	16.7	6.7	3.6
	47.0				27.0		

表19 家庭への不満

—妻が口やかましい—

(%)

項目	尺度		とどきある	たまにある	まったくない
	しょっちゅうある	わりとある			
1. どもも妻は、子どもや自分に口やかましいすぎる	5.2	12.3	30.5	37.0	15.0
	17.5		67.5		
2. 家族は、自分が外でどんなに苦労しているかわかってこない	2.6	7.9	20.3	35.5	33.7
	10.5		55.8		
3. だんだん子どもが、自分の手から離れていくようなさびしさを感じることもある	3.1	7.3	20.5	41.8	27.3
	10.4		62.3		
4. 家族の中で、もう少し自分は大切にされ尊敬されるべきである	2.0	6.7	19.2	32.1	40.0
	8.7		51.3		
5. 仕事や家庭のわずらわしさから逃れて、何日かひとり旅でもしたいと思うことがある	3.8	4.7	14.0	37.1	40.4
	8.5		51.1		
6. 仕事で疲れて帰っても、どもも家では、くつろいだ気分にならない	1.6	6.5	16.1	29.8	46.0
	8.1		45.9		
7. 休みの日など、家族の中で自分ひとりが浮き上がっているような気分がする	1.4	3.7	14.0	24.4	56.5
	5.1		38.4		
8. いまの家庭には、自分がゆっくり好きなことのできる場がなく、きゅうくつだ	2.0	2.9	10.0	21.1	64.0
	4.9		31.1		

(2) 父親のイメージ

青年期に入ると、子どもたちは父親に対してきびしい批判を持ち始めるので、このとき以後、子どもたちは、父親の人間の価値を再評価することになるといわれる。そうした子どもたちの父親評価は気になるところである。

表20は、父親を、社会人・職業人・男性・父親としてといった面から子どもに「とてもある(よい)」から「まったくない(欠ける)」まで6段階で評価してもらった結果である。「とても・かなりある」と高い評価を得ているのは、「仕事に対する意欲」74%、「専門的な知識」67%と職業人としての父親であり、ついで「社会人としての教養」64%、「子どもへの愛情」55%と下がり、「男性としての魅力」となると、甘く見積もっても高い評価はあげられそうにないようである。表20は、子どもたちからの父親評価であったが、父親自

身が感じる子どもからの評価を対比させて実状を把握してみよう。

図33に結果を示した。子どもの父親評価と父親自身のそれとは、ほとんど一致した傾向を示しているが、「専門的な知識」や「社会人としての教養」といった面では父親が子どもたちから高い評価を受けているのがわかる。さらに、父親のイメージを追ってみよう。

表21は、子どもたちが抱く父親像を「A仕事熱心—Bなまけもの」というように一対ずつのイメージ尺度12項目について評定してもらった結果である。ポジティブな印象項目に対する肯定率の高い順に、1位「仕事熱心」、2位「やる気がある」、3位「健康的」、4位「頼りになる」、5位「心が暖かい」である。つまり、子どもの描く父親像は、「仕事熱心で頼りがある」と同時に、「心が暖かい」存在である。この現代の父親像は、子どもにとって理想の父親に近づいているのでは

表20 子どもからの父親評価

—職業人としての父親を高く評価している—

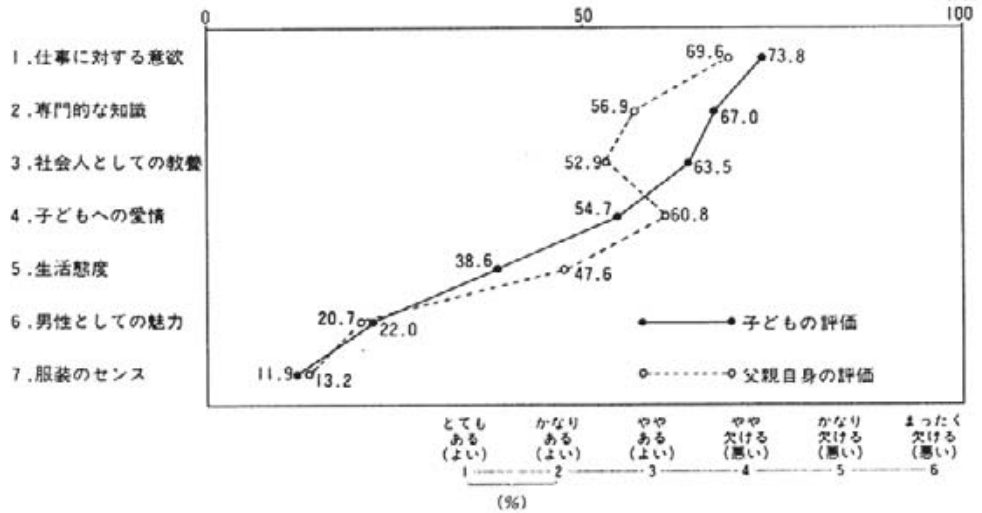
(%)

項目	尺度		やや ある (よい)	やや 欠ける (悪い)	尺度	
	とても ある(よい)	かなり			かなり 欠ける(悪い)	まったく 欠ける
1. 仕事に対する意欲	45.8	28.0	18.3	4.4	2.1	1.4
	73.8				3.5	
2. 専門的な知識	36.0	31.0	22.7	6.1	2.0	2.2
	67.0				4.2	
3. 社会人としての教養	34.1	29.5	24.4	6.5	2.4	3.1
	63.6				5.5	
4. 子どもへの愛情	27.9	26.8	29.8	8.9	2.9	3.7
	54.7				6.6	
5. 生活態度	18.3	20.3	30.2	20.2	6.5	4.5
	38.6				11.0	
6. 男性としての魅力	7.9	14.1	39.9	20.6	9.4	8.1
	22.0				17.5	
7. 服装のセンス	3.2	8.7	32.6	30.0	13.5	12.0
	11.9				25.5	

図33 子どもからの父親評価 (子どもと父親の評価のちがいを)

—子どもは、父の能力を過大評価気味—

(%)



なかろうか。

それでは、父親自身の自己評価はどうであろうか。あらためて、父親の自己評価を、子どもたちの描く父親像と対比させて示してみよう。

図34に目を通してほしい。全体としてみると、子どもの抱く父親像と、父親自身のそれとはほとんど一致した軌跡を描いている。つまり、現代の父親像は「1、仕事熱心で、4、頼りになるうえに、5、心が暖かい」という剛柔を

表21 子どもの抱く父親像
— 仕事熱心で、心が暖かい —

(%)

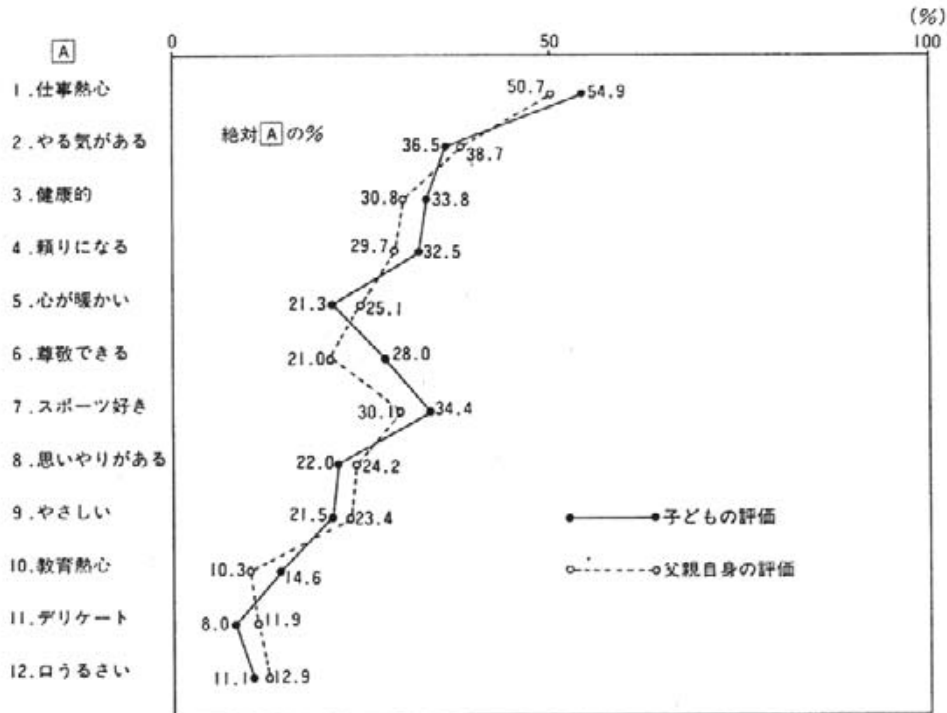
A	絶対	まあ	まあ	絶対	B
	A		B		
1. 仕事熱心	54.9	37.2	6.5	1.4	なまけもの
	└─ 92.1 ─┘		└─ 7.9 ─┘		
2. やる気がある	36.5	52.0	10.2	1.3	やる気がない
	└─ 88.5 ─┘		└─ 11.5 ─┘		
3. 健康的	33.8	51.3	13.2	1.7	体が弱い
	└─ 85.1 ─┘		└─ 14.9 ─┘		
4. 頼りになる	32.5	52.4	12.3	2.8	頼りない
	└─ 84.9 ─┘		└─ 15.1 ─┘		
5. 心が暖かい	21.3	62.5	14.2	2.0	心が冷たい
	└─ 83.8 ─┘		└─ 16.2 ─┘		
6. 尊敬できる	28.0	48.9	18.1	5.0	けいべつしたい
	└─ 76.9 ─┘		└─ 23.1 ─┘		
7. スポーツ好き	34.4	40.0	20.0	5.6	スポーツ嫌い
	└─ 74.4 ─┘		└─ 25.6 ─┘		
8. 思いやりがある	22.0	51.6	21.6	4.8	自分勝手
	└─ 73.6 ─┘		└─ 26.4 ─┘		
9. やさしい	21.5	49.9	23.0	5.6	きびしい
	└─ 71.4 ─┘		└─ 28.6 ─┘		
10. 教育熱心	14.6	38.7	37.0	9.7	無関心
	└─ 53.3 ─┘		└─ 46.7 ─┘		
11. デリケート	8.0	34.2	45.9	11.9	無神経
	└─ 42.2 ─┘		└─ 57.8 ─┘		
12. 口うるさい	11.1	27.5	44.0	17.4	放任的
	└─ 38.6 ─┘		└─ 61.4 ─┘		

合わせ持っているあたりに特性を見いだし得る。そして前章での母親像が「心が暖かくて思いやりがあり、仕事熱心でやる気のある」の通りで、暖かさと仕事の順位が逆になっているものの、現代の父親像と母親像は非常に

接近してきているのが目につく。こうした父親のイメージは、一昔前の父親をイメージに置くとどのように変貌してきているのであろうか。

図34 父親像 (子どもと父親のイメージのちがい)

—ほとんど一致している—



(3) 昔の父と今の父

「カミナリオヤジ」という言葉があったように、かつて恐れられていた父親たちも、近年めっきり「やさしさ」を増してきている。そして本サンプルの父親像が母親像と接近していることはすでに述べた通りである。そこで、もう一度、父親のあり方を考えるにあたって、今の父親と昔の父親との変化を探ってみることにしたい。

父親たちに自身の父親ぶりと、自分の父親とについて、8つの視点から尋ねた結果が図35である。例えば「無理でもそのまま押し通すガンコさがある」かどうか、自分自身の父親ぶりについて評価し、「とてもそう」から「まったくそうでない」の5段階で求めたものを下段に父親自身の自己評価として図示している。なお上段は、父親にとっての父親、つまり一世代前の父親像となる。そしてほとんど

の項目について、かつての父親の方がそうであったという評価が高いのが目につく。例えば「とても・わりとそう」に注目して、図35を集計し直すと

	昔の父(A)	今の父(B)	B/A
1. ガンコさ	57%	43%	75%
2. 高い見識	42%	33%	79%
3. 仕事一途	39%	23%	59%
4. 圧倒する力	37%	23%	62%
5. 一人前扱い	34%	30%	88%
6. 信念の押しつけ	29%	28%	97%
7. 子ぼんのう	27%	35%	130%
8. 体面を保つ	22%	16%	73%

の通りとなる。

この中で、昔の父と今の父とで際立った開きを見せているのは、「昔の父親の仕事一途」と「今の父親の子ぼんのう」であろう。

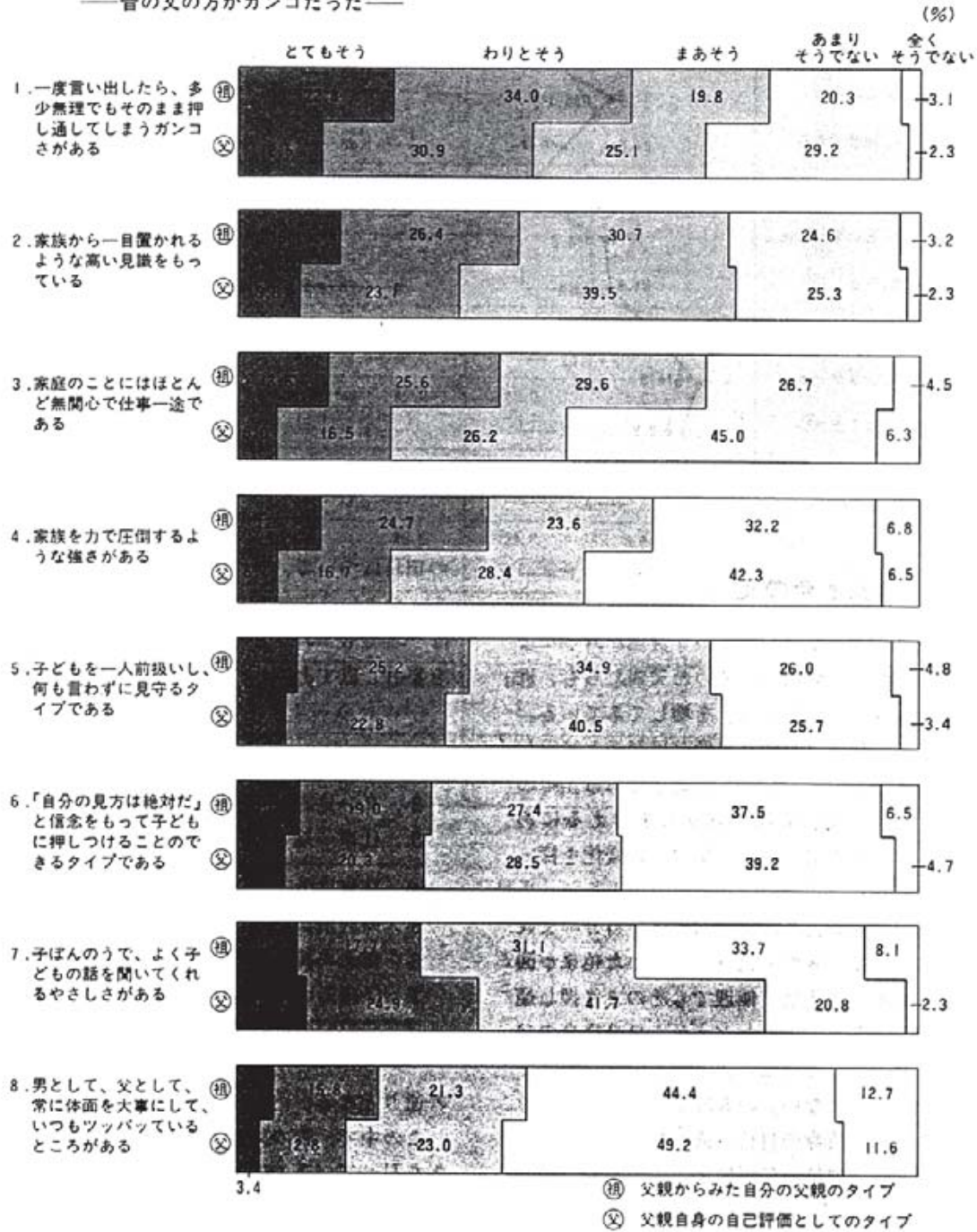
そこで、現代における「子ほんのう」の父親と「仕事一途」の父親の違いがどんな意味を持つのかを探ってみることにしよう。

まず図36は、現代の子ほんのうの父親とそうでない父親とで、現在の状況についての満

足感がどの程度ことなるのかを示したもので、図中のプロフィールは、「とても・かなり満足」の割合を示している。図中のプロフィールから明らかなように、現状についての満足感、子ほんのうな父親であるかないかと深

図35 祖父はどんなタイプだったか（「父親の父」と「子どもにとっての父」）

—昔の父の方がガンコだった—



い関係を示している。つまり子ほんのうの父親は、子どもに対する満足感だけでなく、住居・職業上の地位・収入・学歴とあらゆることに高い満足感を抱いている。

次に図37に、仕事一途かどうかと、現在についての満足感とのクロス集計結果を示したが、どの領域においても、予想を裏切って満

足感にほとんど差がみられなかった。

そこで、父親が子ほんのうか、あるいは仕事一途かを父親の自己像に関連させて考察してみよう。

図38・39に目を通してほしい。先ほどと同じように、子ほんのうな父親の方が、自己評価が高く、そうでない者の評価の低さが目を

図36 子ほんのうの父親×現状についての満足度

——子ほんのうの父に満足感が高い——

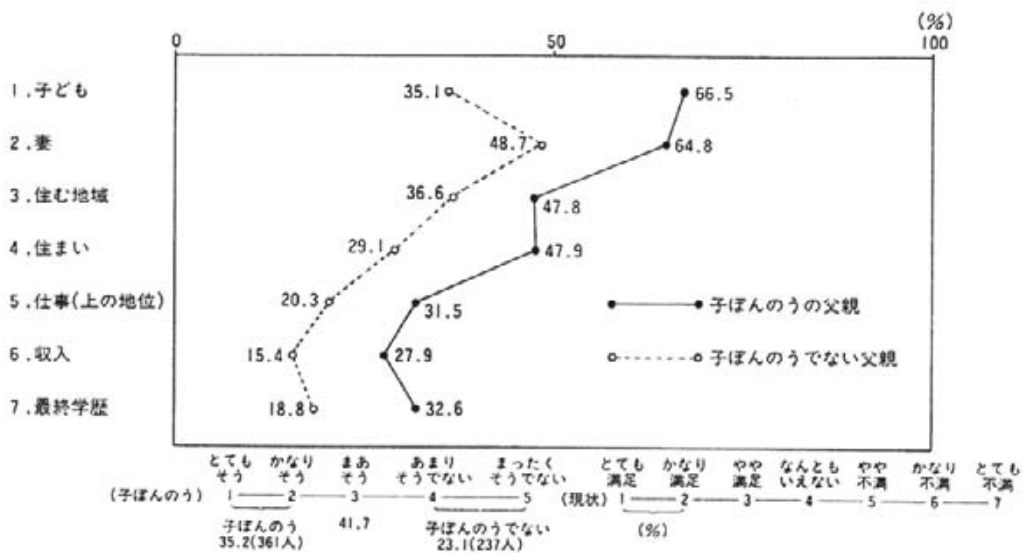


図37 仕事一途の父親×現状についての満足度

——仕事との関係はうすい——

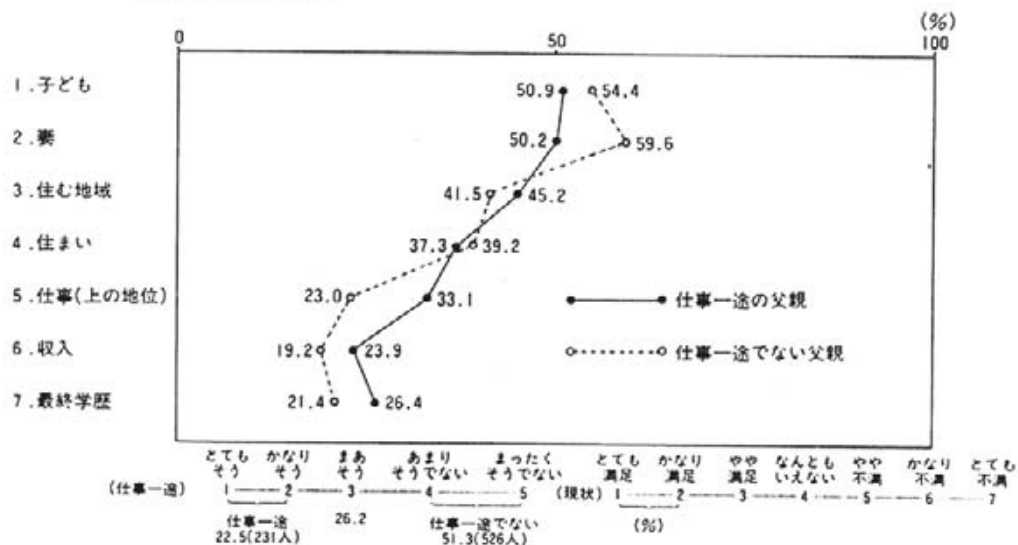


図38 子ぼんのうの父親×父親の自己像

—子ぼんのうの父の自己像は明るい—

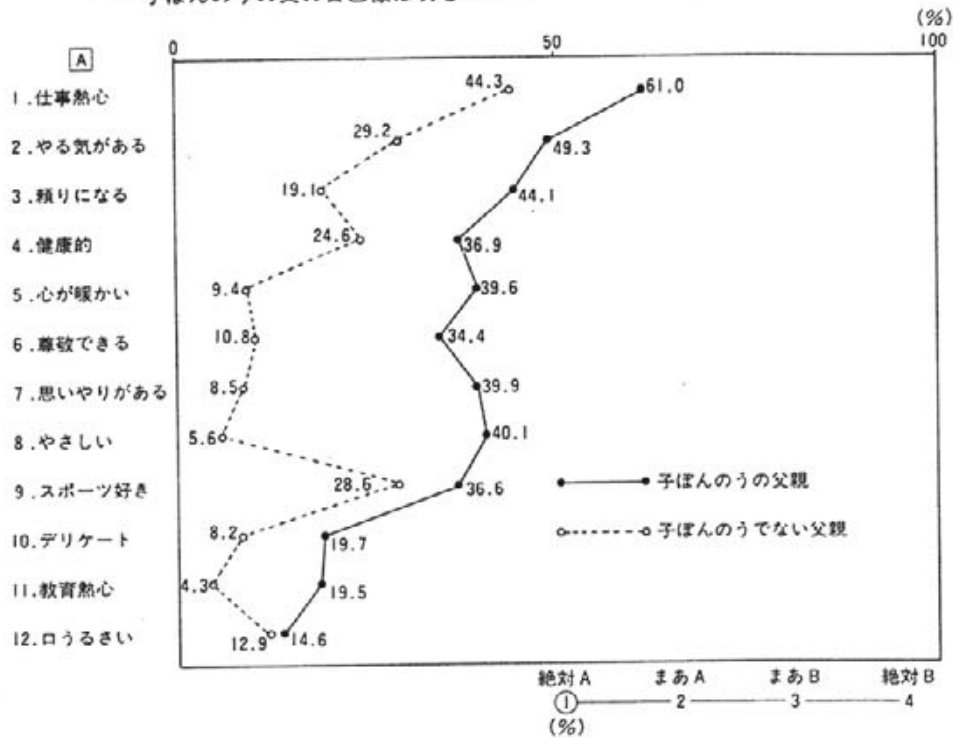
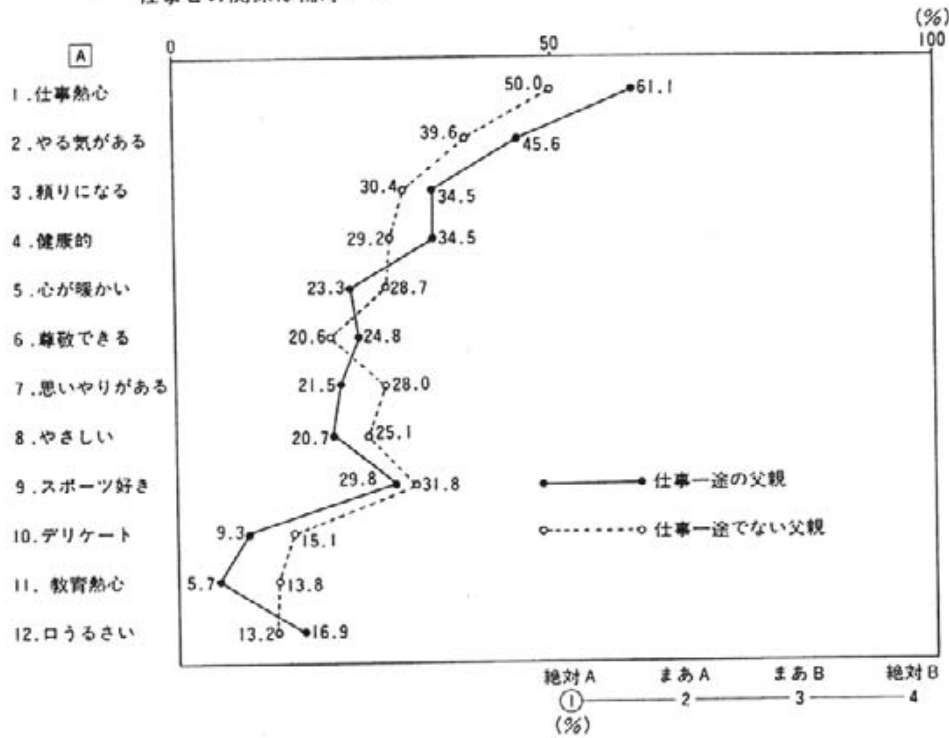


図39 仕事一途の父親×父親の自己像

—仕事との関係は稀薄—



引く。また父親が仕事一途であるかも、図37の結果と同様に差は認められなかった。

こうした結果を、今までの数値と重ね合わせて考察するなら、現代の父親たちは、昔の父親に比べて、「頼もしさ」に加えて「やさしさ」を兼ねそなえている。一言でいうなら

ば「子ぼんのう」に象徴される父親像でもある。しかし表22によると、子ぼんのうな父と仕事熱心の父とがかならずしも両立していないように見える。

それでは、父親たちは子どもとどのようにつきあっているのでしょうか。

表22 子ぼんのうの父親×仕事一途の父親
——両立はむずかしそう——

	仕事一途	ふつう	仕事一途でない
子ぼんのう	19.5 ↓	20.3	60.2 ↑
ふつう	20.6	31.6	47.8
子ぼんのうでない	30.8 ↓	25.3	43.9

(%)

2. 子どもと父親とのふれあい

(1) 父と子との会話

子ぼんのうの父という、高校生を持つ父として新しいタイプが浮かび上がってきた。日本の青年たちは、親との会話、とりわけ父親とのそれがきわめて少ないと言われているが、それでも高校生と父親との会話はどのようになされているのでしょうか。

図40は、子どもに、「お父さんとはよく話をしますか」と尋ねた結果である。「よく話をしている」子どもは36%で、前章で母親とは7割近くの子が「よく話をしている」と答えていたことを考えると、やはり父親との会話は、母親とのそれよりずっと少ないという印象を受ける。しかし「ときどき話をしている」も含めると、話をする割合は7割以上に達するから、父親との会話量も心配するほど少ない。かえって父と子とでいったい何を話しているのか、気になる気持ちすらしてくる。

そこで、母親に尋ねた項目と同じ項目の話題を14項目用意して、会話の頻度を尋ねた結

果が表23である。「しょっちゅう・わりと話している」割合の高い順に、1位が「プロ・スポーツ」の44%で、以下「勉強・成績」35%、「卒業後の進路」35%、「学校でのできごと」30%と続く。1位に「プロ・スポーツ」がきているが、これはおとな同志でもよく話題になる、あたりさわりのない話題である。他に上位にあがっている「勉強・進路」は、母親でも上位に位置していたものであり、子どもたちから、親は口を開けば勉強のことしか言わないというような不平も聞こえてきそうな結果である。そして父親が母親と同じような接し方をしているこうしたデータに、子どもたちがもっぱら女性の感覚で社会化がなされるのではないかという危惧が感じられなくもない。

次に図41では、父親との会話の頻度の性別の結果を示した。母親との会話では、女子の方がすべての項目について圧倒的によく話していたが、父親との会話では、話題によって性差が逆転している。具体的にみてみると、

図40 子どもが父親と会話をするか(子ども評価)

—話をする子が74%—



表23 子どもと父親の会話の頻度(子ども評価)

—勉強のことが上位に—

項目	尺度	話している		たまに話している	話していない		
		しょっちゅう	わりと		あまり	ほとんど	まったく
1. プロ・スポーツ		20.8	23.6	21.3	10.2	8.0	16.1
		44.4			34.3		
2. 勉強・成績のごと		11.4	23.6	32.2	14.9	9.9	8.0
		35.0			32.8		
3. 卒業後の進路		10.3	24.3	33.2	14.2	9.4	8.6
		34.6			32.2		
4. 学校でのできごと		9.8	20.4	27.9	15.9	13.1	12.9
		30.2			41.9		
5. 将来の夢や希望		7.7	18.3	27.1	19.0	14.1	13.8
		26.0			46.9		
6. 社会的な事件		6.7	16.4	26.4	18.0	15.0	17.5
		23.1			50.5		
7. 親の仕事		5.8	14.3	25.9	18.5	17.3	18.2
		20.1			54.0		
8. 友人関係		3.9	10.9	23.1	21.3	18.2	22.6
		14.8			62.1		
9. 自分のおいたち(小さいころの思い出)		4.6	8.9	24.0	19.9	19.4	23.2
		13.5			62.5		
10. テレビ・ラジオで話題のギャグ		4.0	7.6	16.0	14.6	21.0	36.8
		11.6			72.4		
11. いまヒット中の音楽		1.5	6.4	14.5	14.1	22.0	41.5
		7.9			77.6		
12. お互いの洋服の趣味・センス		1.8	5.6	13.3	13.8	23.1	42.4
		7.4			79.3		
13. 異性とのつきあい		1.1	1.6	4.7	8.1	19.9	64.6
		2.7			92.6		
14. 性について		0.7	0.6	2.5	7.5	18.2	70.5
		1.3			96.2		

「勉強・成績」「卒業後の進路」は、男子が79%と70%であるのに対し、女子は63%と62%で、1割近く男子（息子）の方が高い。また女子の方が高い数値を示すのは「テレビ・ラジオで話題のギャグ」35%、「いまヒット中の音楽」29%、「洋服の趣味・センス」26%で、男子のそれは、順に24%、20%、18%である。これらの結果は、父親が息子とは勉強を中心として進路のことを話し、娘とはリラックスした感じで日常の会話をかわしているのを示している。

次に、父親に同じ質問を試みてみた。なお図42は、現代の父親の象徴ともいえる、子ばんのうかどを軸として、子どもとの会話の頻度を分析した結果である。当然の結果ともいえるが、すべての項目について、子ばんのうの父親が圧倒的によく子どもと会話している姿が浮かんでくる。このプロフィールを手がかりにすると子ばんのうの父とは、子どもとよく話をする父であり、さらにいうなら、子どもと話のできる若々しい父なのであろう。

図41 子どもと父親の会話の頻度×性別（子ども評価）

—男の子への期待が強い—

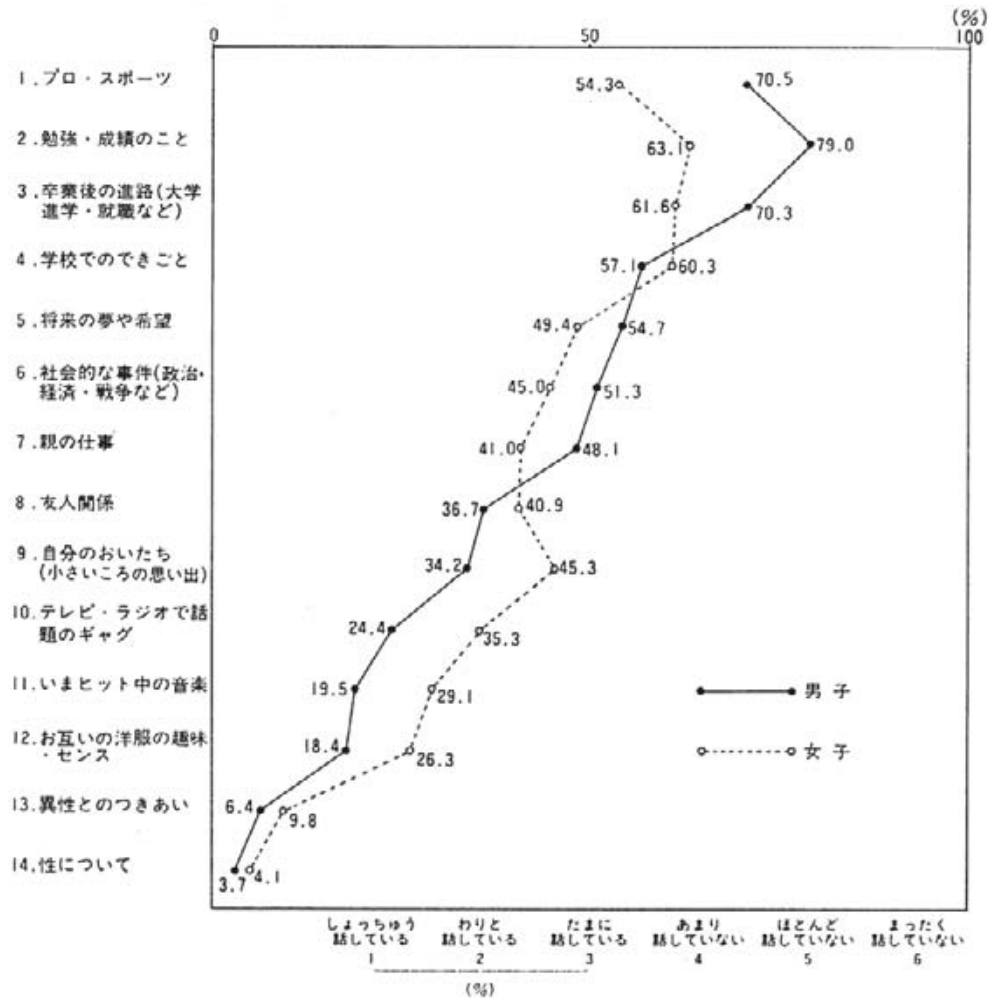
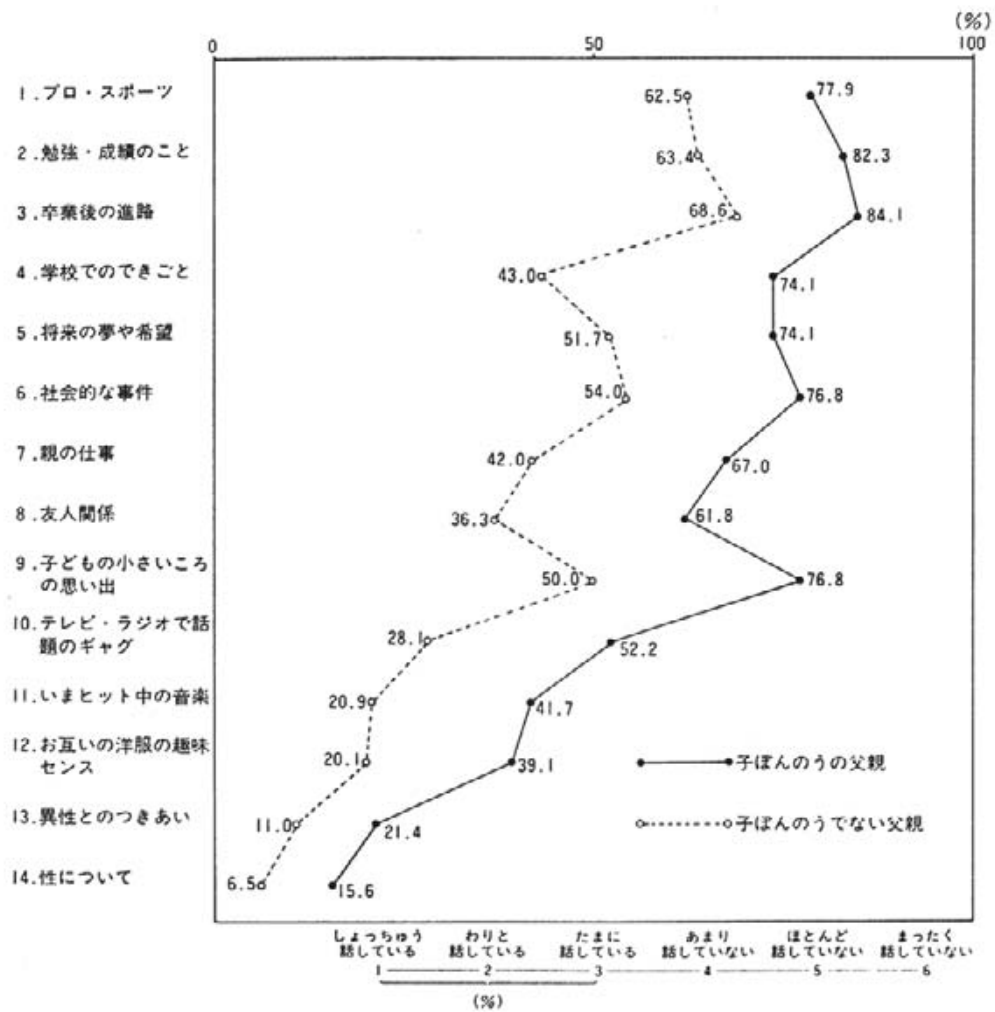


図42 子ばんのうの父親×父と子の会話の頻度(父親評価)

——よく話す父は子ばんのう——



(2)父子関係の円滑さ

このように会話を通して見るなら、子どもと父親の関係は、そこそこにうまくやっているように見える。そこで直接に子どもに「お父さんとうまくいっているか」を尋ねてみた。

図43は、現在の父親との関係だけでなく、「小学校低学年のころ」から「現在」までの過去の事実と、「結婚するころ」までの将来の子訓も試みてもらった結果である。「とても・かなりうまくいっている」割合に注目してみると、父親といちばんうまくいっていたのは、「小学校低学年のころ」で66%である。その後、次第に父親とうまくいっていたと答える者は減り、「中学生のころ」最低となり、45%と4割台にまで落ち込む。そして「現在」になるとやや持ち直して、48%となるが、その後の見通しは今とあまり変わらないように見える。現代っ子たちは、反抗期を経験しないで成長しているといわれているが、本サンプルの高校生が、中学生のころ、父親とうまくいかなかった様子は、第二反抗期と関係がありそうである。いずれにせよ、父親ととてもうまくいっていると言い切ることのできる高校生は、全体の約半数に達する。しかし、父親と、あまりあるいはぜんぜんうまくいっていない子どもは、1割程度と少ない。したがって、図のプロフィールから反抗期を認めるとしても、それはきわめて弱いものと考えられる。なお、性別の結果は、紙面の都合上割愛したが、性差は認められなかった。

それでは、このように父親とうまくいく、いかないは、いつ、そしてどうして起こったのか。その究明の一端として、現在の父親との関係がいつごろから生じたのかを、図44で

探ってみた。これは、父親との関係が「とてもうまくいっている」者19% (289人)を、「うまくいっている群」とし、「ややうまくいっている」から「ぜんぜんうまくいっていない」者52%(792人)を、父親との関係が不信気味の子もたちであるとし、「うまくいっていない群」の2群に分けて、クロス集計をとったものである。図が示すように、現在父親と「うまくいっている群」は、小学校低学年のころから9割に達する者が父親と「とても・かなりうまくいっていた」と答え、将来に対してもそのようにうまくいこうと予想している。それに対して、「うまくいっていない群」は、いちばんうまくいっていたであろう小学校低学年のころでさえ45%と5割に充たない。そして、学年が上がるにつれてうまくいく割合は減り、中学生のころでは9%にまで落ち込み、その後の回復の見込みもあまりないように見える。この結果から、父親と「うまくいっていない群」の子もたちが、小学校低学年のころから、父親とうまくいっていないところを見ると、何かしら父親のサイドに問題点があったように思われる。しかし、それと同時に、父との関係の冷たさは中学生時代に経験した第二反抗期のあおりが残っているのか、あるいは、反抗期とまでいかななくても、青年期特有の親に対する反抗心が生じたのかとも考えられる。それに対して、「うまくいっている群」の子もたちは、子どもころの関係がそのまま持続し、第二反抗期を経験しないで育ってきた子どもたち、あるいは、反抗の兆しが認められない子どもたちであろう。

それでは、実際に父親との接触状況のみてみよう。

図43 父親との関係の変化(子ども評価)

—お父さんとの間はうまくいっている—

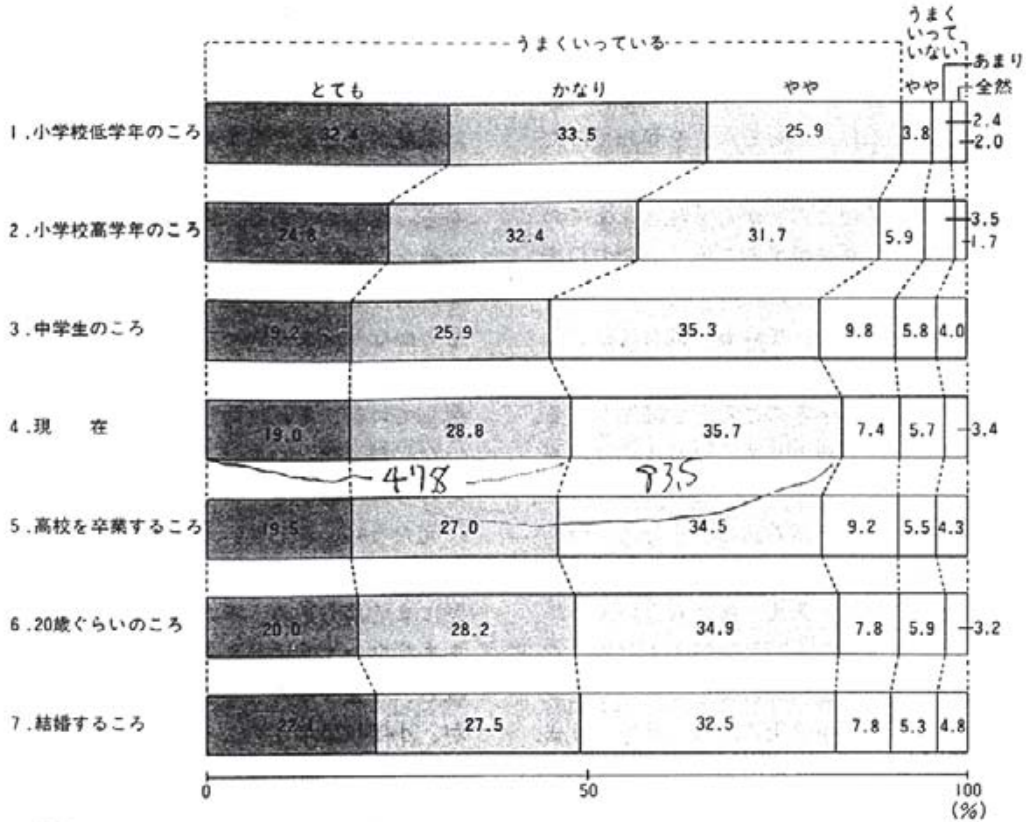
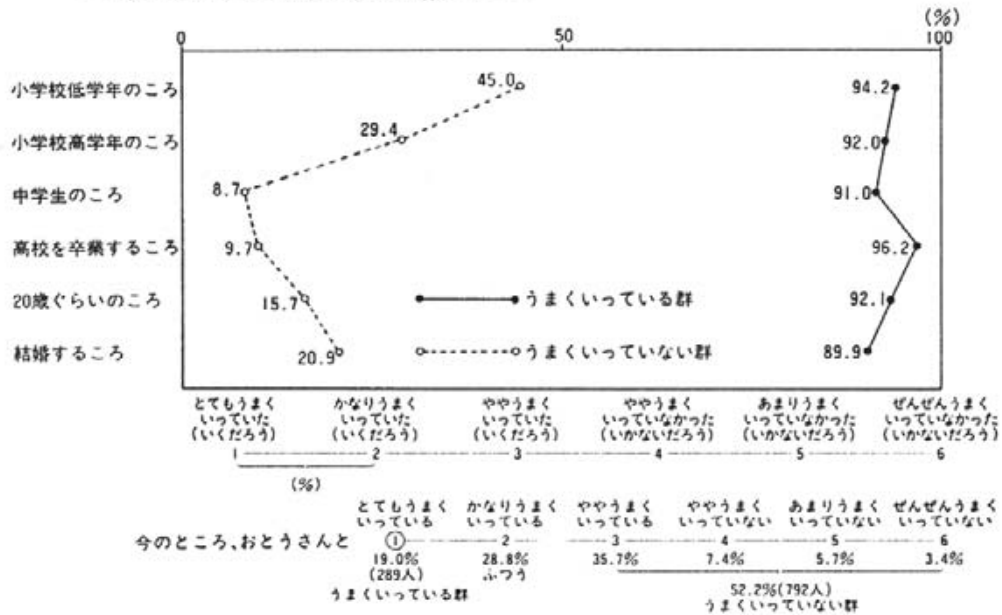


図44 子どもと父親との関係×子どもと父親との関係の変遷

—うまくいっている子はずっと前から—



(3) 父子関係がうまくいっているとは

図45は、子どもと父親が「しょっちゅう話している」から「たまに話している」までの会話量を、子どもと父親の関係別に示した結果である。すべての項目について、父親と「うまくいっている群」の子どもたちが、圧倒的に父親と話をしていることがわかる。

つぎに、これらの子どもたちが、どのような父親とつき合っているかを、子どもの描く父親像のイメージから考察することにしよう。結果は図46に示した通りだが、「うまくいっている群」の子どもたちの父親が評価が高いのが目につく。父親像のどの項目についても

差が大きい、とりわけ、差の大きな項目を整理してみると、

	うまくいっている群 (A)	うまくいっていない群 (B)	A-B
1位 心が暖かい	59%	7%	(52%)
2位 尊敬できる	63%	12%	(51%)
3位 思いやりがある	58%	8%	(50%)
4位 頼りになる	66%	16%	(50%)

の通りとなる。

つまり、父親との間が「うまくいっていない群」の子どもの場合父親に対して「やさしさ」も「頼もしさ(きびしさ)」も抱けないでいる。それに対し、父親と「うまくいって

図45 子どもと父親の関係×子どもと父親の会話の頻度

—会話はうまくいっている証し—

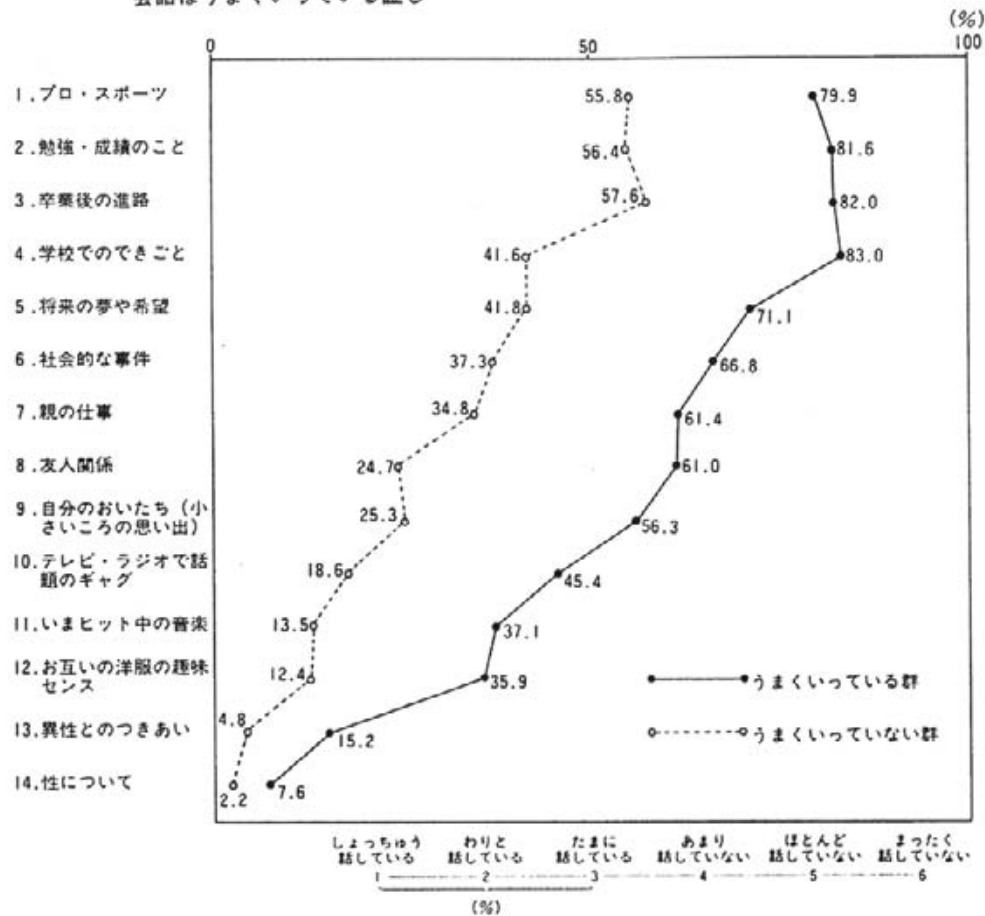
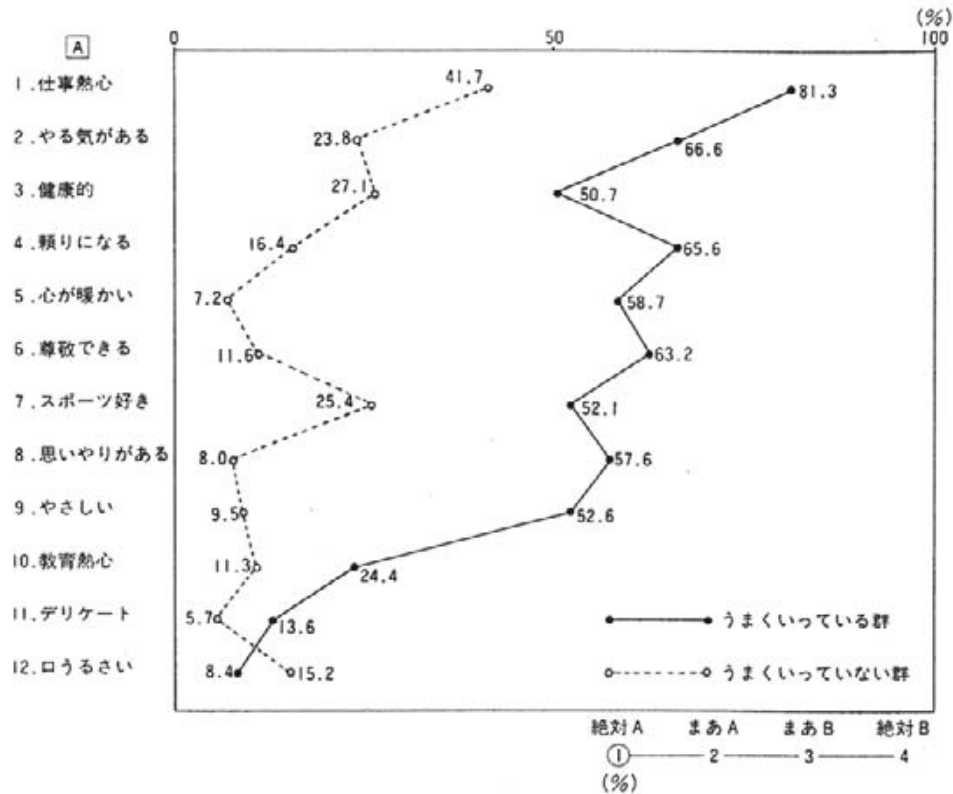


図46 子どもと父親の関係×子どもの抱く父親像

—うまくいっている子の父親像は明るい—



いる」子どもたちの父親像は「心が暖かく尊敬できる」である。したがって、やさしさときびしさがセットになった形で、現代の父親像は成り立っており、両者は分離し得ないものなのであろう。

これまで、子どもと父親との関係のあり方を父親サイドから見てきたが、子どもと接する機会や時間が多いのは、なんといっても母親であろう。そうした事情を考え合わせると、子どもと父親の関係は、母親と子どもの間にも影響を与えると考えられる。

(4) 父子と母子との間

そこで図47に、父子関係と母子関係のクロス集計の結果を示した。父親と「うまくいっている群」の子どもたちは、母親との関係もうまくいっており、「とてもうまくいって

る」79%に、「かなりうまくいっている」を含めると9割にも達する。それに対し、父親と「うまくいっていない群」の子どもたちは、母親と「とてもうまくいっている」子は9%、「かなりうまくいっている」を含めても3割に達するにすぎない。したがって、父子関係がうまくいくためには、母子関係もうまくいっていることが重要であることがわかる。さらにいうなら、親子の間で母子のみ、あるいは父子のみうまくいっていることはあり得ないのであって、母子=父子であることを図47は示しているといえよう。

そうしたデータを裏づけるために、今度は母子関係の良し悪しと、父親の家族や子どもへの接し方をみてみよう。

まず1週間に、父親が家族とどれくらいいっしょに朝食や夕食を食べているかを、子ど

図47 子どもと父親との関係×子どもと母親との関係

— 父子の関係は母子にも —

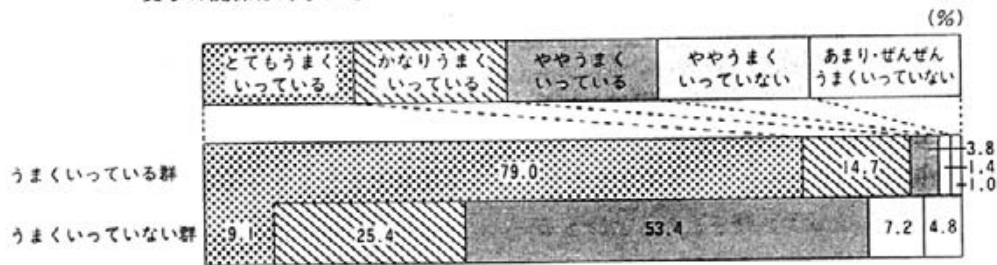
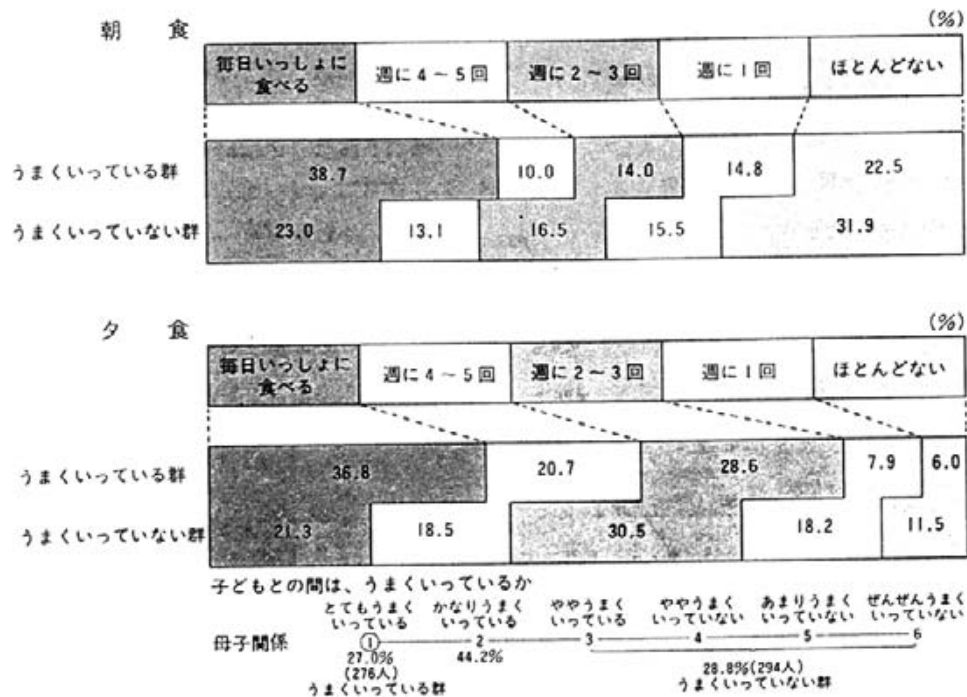


図48 子どもと母親の関係×父親が家族と食事をとる頻度(母親評価)

— 接触量の多さも大事 —



もと母親の関係別に示した結果が図48である。この図で使った子どもと母親の関係は、母親に尋ねた結果で、「うまくいっている群」とは、父子関係のときと同様のカテゴリーを利用してある。そして子どもと「とてもうまくいっている」母親たち27%（276人）で、それに対し「うまくいっていない群」は、子どもと「ややうまくいっている」から「ぜんぜ

んうまくいっていない」と、子どもとの関係を不信気味に感じている母親たち29%（294人）のことを指していることを断っておこう。

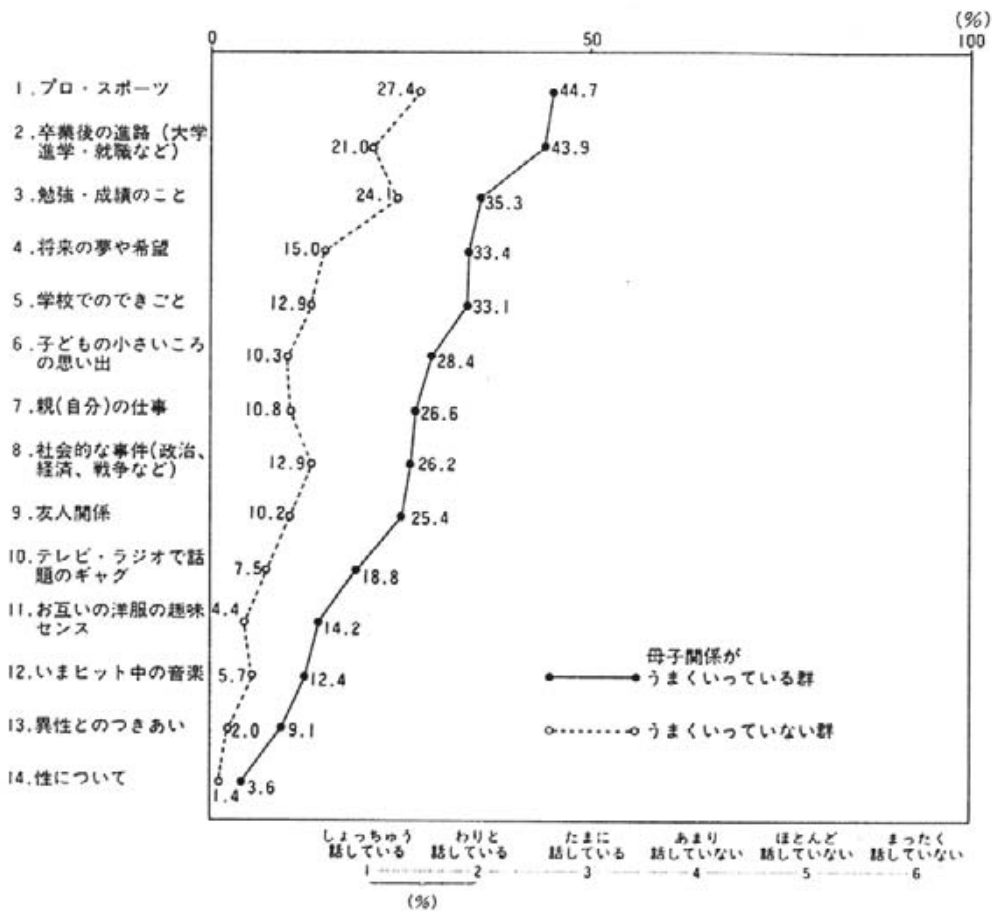
そして図48によると、子どもと「うまくいっている群」の母親の夫が「家族といっしょに毎日、朝食や夕食を食べている」割合は4割近くおり、「週に4-5回」を含めると、5割に達する。それに対して、子どもと「う

まくっていない群」の母親の夫が「毎日いっしょ」は2割であり、「週に4～5回」を含めても4割程度である。

また、子どもと母親の関係別に、子どもとの父親の会話の状況をみたのが、図49の結果である。明らかに子どもと「うまくいっている群」の母親の夫が、父親として子どもとの

会話量が多い。つまり、子どもと母親がうまくいっているためには、父親と子どもとの関係が影響しているように見える。つまり、夫婦中心家庭、あるいは子ども中心家庭にしろ、父と子、あるいは母と子の関係が、それぞれ分離されたものでなく、父・母と子どもといった関係であることが明らかになった。

図49 子どもと母親の関係(母親評価)×子どもと父親の会話の頻度(父親評価)
——母子関係の影響もある——



3. 子どもが父親を越えるとき

(1) 越えにくい父親像

これまで、父子関係のあり方を、子どもと父親とがうまくつきあうを軸として追い求めてきたが、青年期のもう一つの課題は、親からの自立にあらう。そこで、ここでは子どもの自立を、精神的にも能力的にも父親に追いつき、追い越すということに代表させ、考察を試みてみたい。

まず、追い越す側の子どもたちは、父親からどのような評価を得ていると思っているのであろうか。結果は表24に示した通りだが、「とても・かなりある(よい)」に注目してみると、子どもたちが、自信を持って答えら

れるのは「健康」の52%でやっと50%を越えるくらいで、続く「友だちづきあい」になると43%と50%を割ってしまう。また「性格」から「成績」に至るまで、父親からよい評価を受けていないと感じている。すでにふれた通り、図43によると、父親とは「とても・かなりうまくいっている」と答えた者が半数近くに達した。それにしても父親から評価されていると感じている者が、少なすぎるように思える。

父親からあまり評価されていないと感じている、つまり、いささか自信のない、こうした子どもたちは、父親を追い越し、一人前のおとなになることができるのであろうか。表

表24 父親からどう思われているか
—父の評価に自信を持てるか—

項目	尺度		ややある(よい)	やや欠ける(悪い)	%	
	とてもある(よい)	かなりある(よい)			かなり欠ける(悪い)	まったく欠ける(悪い)
1. 健康	25.3	26.7	26.8	15.8	3.6	1.8
	52.0				5.4	
2. 友だちづきあい	16.5	26.5	41.9	10.4	2.4	2.3
	43.0				4.7	
3. 性格	7.2	16.0	46.3	21.0	6.3	3.2
	23.2				9.5	
4. 生活態度	5.9	14.3	38.4	27.5	8.6	5.3
	20.2				13.9	
5. 数学の成績	6.5	13.3	27.8	23.8	15.2	13.4
	19.8				28.6	
6. 英語の成績	5.6	12.6	31.7	23.4	15.5	11.2
	18.2				26.7	
7. 勉強に対する意欲	5.7	11.4	29.0	28.0	16.4	9.5
	17.1				25.9	
8. 男性(女性)としての魅力	5.2	7.6	42.1	28.1	9.3	7.7
	12.8				17.0	

25に目を通してほしい。これは「英語の力」から「お金をかせぐ力」までについて、子どもたちが父親を追い越した自信のほどを尋ねた結果である。「小学校高学年のころ」から「このごろ越えた」を合わせた割合の高い順に並べてあるが、まずもうすでに越えてしまった第1位は「英語の力」であり、「このごろ」まで含めると父親に勝っていると答えた子どもは、68%と7割近くいる。第2位は、「数学の力」の64%だが、第3位の「体力」になると47%に減ってしまい、第4位の「がんばる力」以下2割を切ってしまう。つまり子どもたちが、父親を越えたと自信を持っているものは、「英語・数学の力」や「体力」であり、「がんばる力」や「社会についての見方」などは、とうてい追いつきそうにないと自覚している。もちろん、子どもたちがおとなになるためには、これらの項目でも父親に追いつき、追い越さなければならない。

「ずっと勝てそうにないだろう」とあきらめている子が、軒並み3割～4割も見受けられることが気かりとなる。

なお、図は省略したが、男女別に集計してみると、女子の方が父親を越えにくい存在としてみている割合が高い。

それではこうした子どもの気持ちを、追い越される側の父親の意識と対比させてみよう。結果は、図50に示した通りだが、今度は、父親が我が子がもうすでに自分を追い越したと思う割合の高い順に項目を示してある。全体としてみると、子どもの評価と父親の思いとがほぼ一致している。しかし、父親が思っている以上に「これからもずっと越えそうにない」とする断念組の割合が高いのが目につく。父権喪失などといわれて、マスコミなどでは父権の力は失われたかのようにいわれる。しかし、仕事に意欲を燃やす父親は今もって「偉大な存在」として子どもたちの目にうつって

表25 子どもが父親を越えられるか(子ども自身の評価)

—父親を越えにくい—

(%)

項目	勝った			勝てるだろう		ずっと勝てないだろう
	小学校高学年のころ	中学生のころ	このごろ	20歳ぐらいになれば	25歳ぐらいになれば	
1. 英語の力	3.7	41.9	21.9	18.5	4.9	9.1
	67.5			23.4		
2. 数学の力	7.1	28.9	28.0	17.7	5.1	13.2
	64.0			22.8		
3. 体力	2.3	16.2	28.4	24.4	9.2	19.5
	46.9			33.6		
4. がんばる力	1.9	5.3	12.2	29.4	22.2	29.0
	19.4			51.6		
5. 人とのつきあい方	3.1	4.7	10.0	25.9	27.9	28.4
	17.8			53.8		
6. 社会常識	1.4	2.3	5.9	23.4	39.0	28.0
	9.6			62.4		
7. 社会についての見方	1.0	2.0	6.3	21.7	38.1	30.9
	9.3			59.8		
8. お金をかせぐ力	0.8	0.4	1.1	9.1	48.8	39.8
	2.3			57.9		

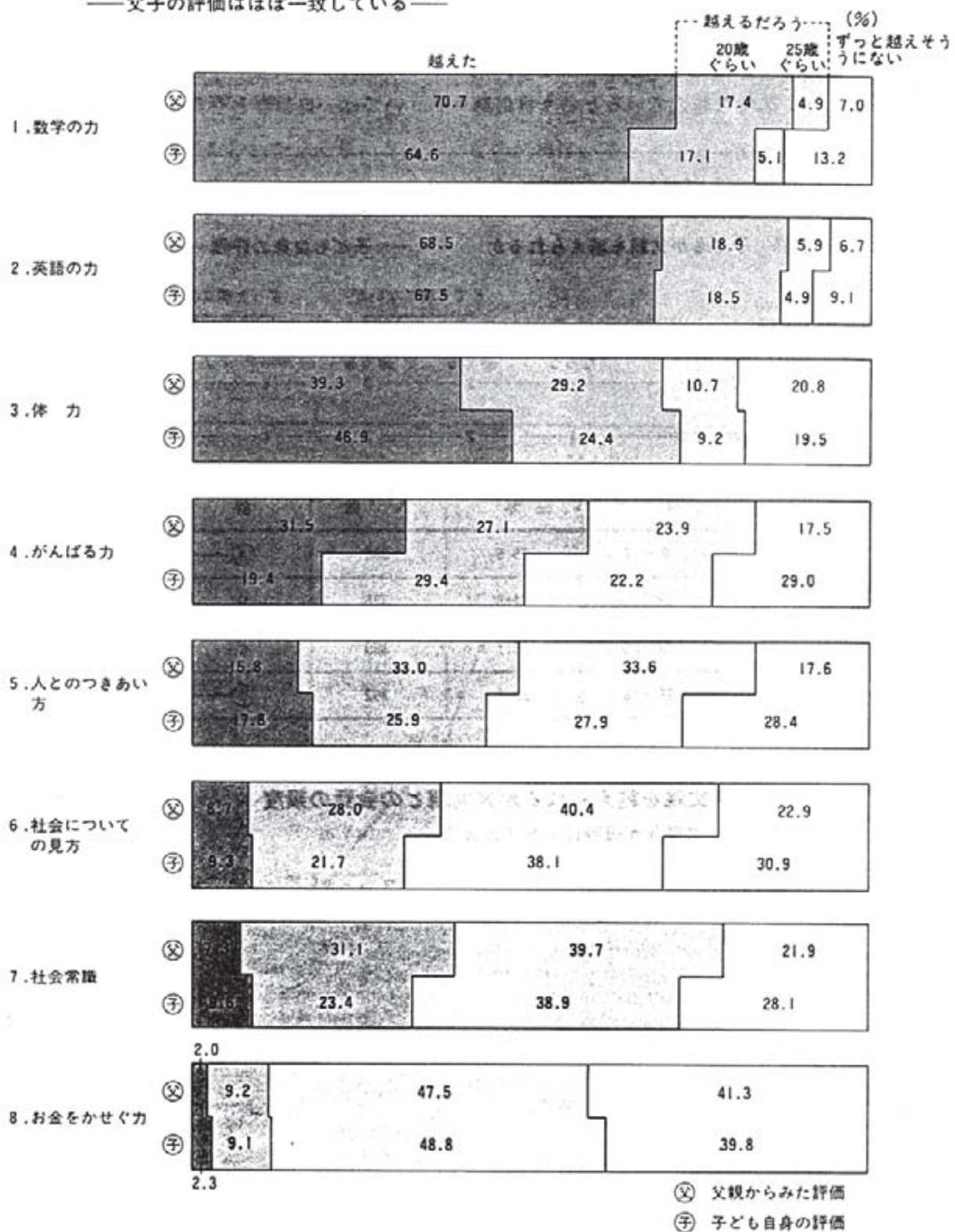
いる。このことは、父親たちにとっては、喜ばしいことであろう。しかし、父を越えることが社会的におとなになる前提であることを考えるならば、これでは子どもがチャレンジする前にあきらめることになる。その結果お

となしい高校生が大量に発生してくる。そうした子どもの姿がいささか心配になる。

それでは、子どもが父親を越すことができるかどうかの違いは、どのような親子関係から生じるのであろうか。

図50 子どもが父親を越えられるか（父と子の評価）

—父子の評価はほぼ一致している—



(2) 越えやすい父と越えにくい父

前節の問いかけに答えて、子どもが父親の力を総合的に越えているかどうかを、表25の項目尺度を加算することによって測ることにした。点数の低い者の、下から26% (388人) を父親を越えることに対する不自信群とし、高得点の者から24%(362人) を自信群として、分析を試みることにしたい。

まず、図51は、両親との会話の頻度を、先程算出した、父親を越えているという自信群

と不自信群別にクロス集計を行なった結果である。予想外ともいふべきか、それとも予想通りと考えたらよいか、難しいところだが、父親・母親とも、不自信群の方が父親とよく話をしている傾向が認められている。それでは、会話の内容に違いはみられるであろうか。図52に「しょっちゅう」から「たまに話している」割合を合わせた数値で結果を示してみた。「プロ・スポーツ」「いまヒット中の音楽」「趣味」「異性」「性」については、自信群と不自信群で差はみられない

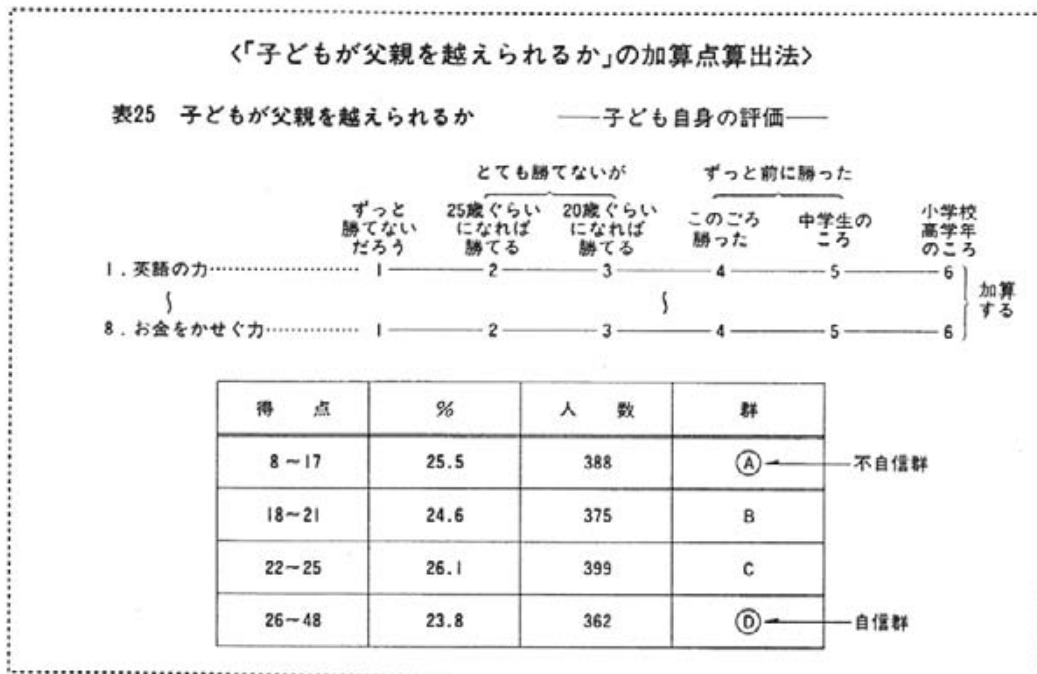
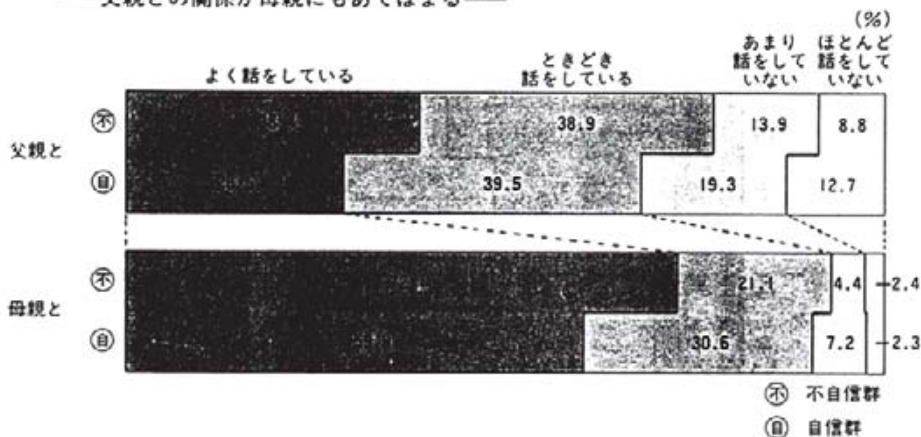


図51 子どもが父親を越えられるか×両親との会話の頻度

— 父親との関係が母親にもあてはまる —



が、その他の項目「勉強」「進路」「学校のできごと」等においては、明らかに不自信群の子どもたちに父親との会話量が多いようにみうけられる。

また数値には示していないが、母親との会話量も同じような結果が得られている。

こうしたデータを手がかりにすると、父親を越えることに自信を抱けない不自信群の子どもたちの両親は、よく子どもと接触し、コミュニケーションを図る民主的な親たちであるように思える。そして、こうした父親たちは、少なくともかつてのものわりの悪いガンコオヤジではなさそうである。

さらに、父親を越えられそうにない子ども

たちの抱く父親評価をみてみよう。

図53は、父親を、社会人・職業人・男性・父親として、といった面から、自信群と不自信群の子ども別に集計した結果である。父親を越えられそうにないといった不自信群の子どもたちが、すべての項目について、父親評価が非常に高いことがわかる。父親がこれほど「偉大な存在」として子どもの前に立ちただかっているのであれば、不自信群の子どもたちが、父親を越せないのはやむを得ない気もする。逆に、親を越えたと思っている子どもたちの父親は、子どもにとって越えやすい存在であったような感じがする。

図52 子どもが父親を越えられるか×子どもと父親の会話の頻度

—父親を越えるのは会話のなさから?—

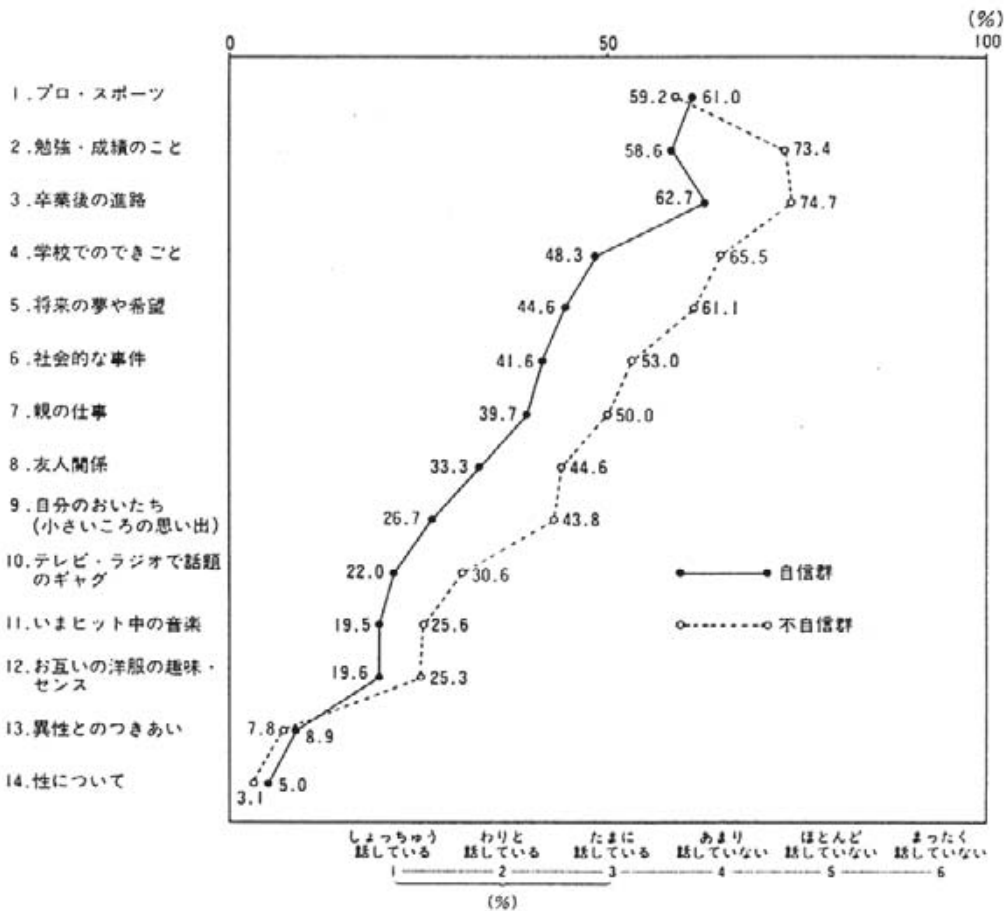
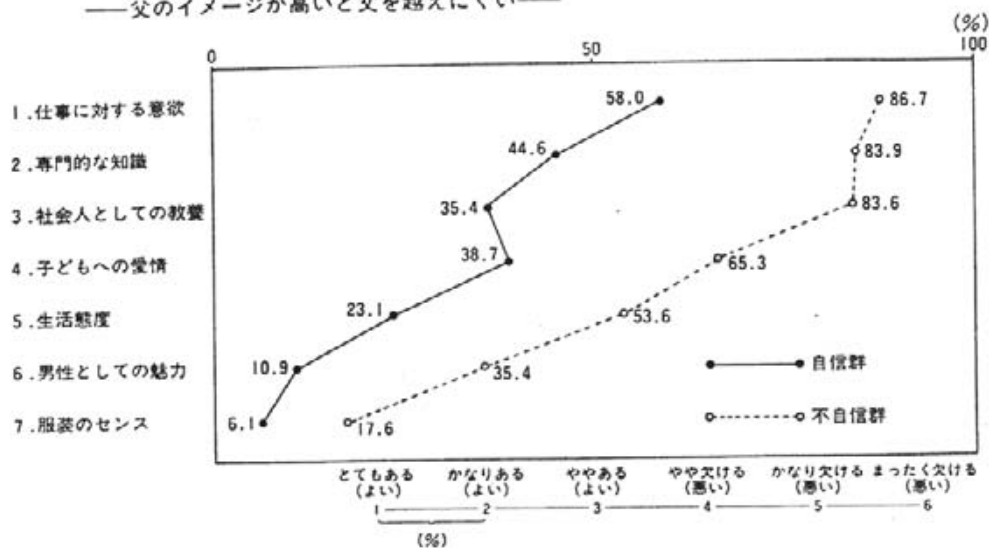


図53 子どもが父親を越えられるか×子どもからの父親評価

—父のイメージが高いと父を越えにくい—



(3) 父であることの証し

さらに、父親を越えられるかと、父子関係変化を考察した結果が図54である。偉大な父を持ち、父を越えられないと思っている子どもが、親子関係の面からみると、父になつき、父と円滑な関係をずっと続けていたのがわかる。それと同時に、図55によると、そうした関係は父と子だけでなく、母と子との間にも指摘できるように考えられる。

なお図56によると、親を越えられない子どもたちは、今もなお親たちから、あれこれと注意を受ける割合が高い。

これから今までのデータのまとめを行なっておこう。現代の父親像が、偉大さをそなえているうえに、民主的になったことはすでにふれた通りで、これは子どもにとって理想の父親に近づいたことになろう。しかし、皮肉

なことに、そうであればあるほど、反抗し、そして乗り越える目標としての父親の性格は弱まらざるを得ない。そして、子どもたちは、反抗期を経験しないままに、親にいつまでも依存を続け、自立の機会を失う。考えてみると、子どもが親を乗り越え、親の許を離れた時に、親としての使命が終わる。そうした意味では、子どもを自立させない父親は、いつまでも父親であって、父としての務めを終えられないことになろう。したがって父親としては、一種のスキを作り、子どもからすると、越えやすい雰囲気をかもしだす。しかし、そうした一方、決して越えられない領域を作り、父としてのメンツをかけて、それは最後まで死守しようとする。そうした形で子どもの自立を促すのが、現代の父親に課せられた使命なのであろう。

図54 子どもが父親を越えられるか×子どもと父親との関係の変遷

—父とうまくいっていると父を越えにくい—

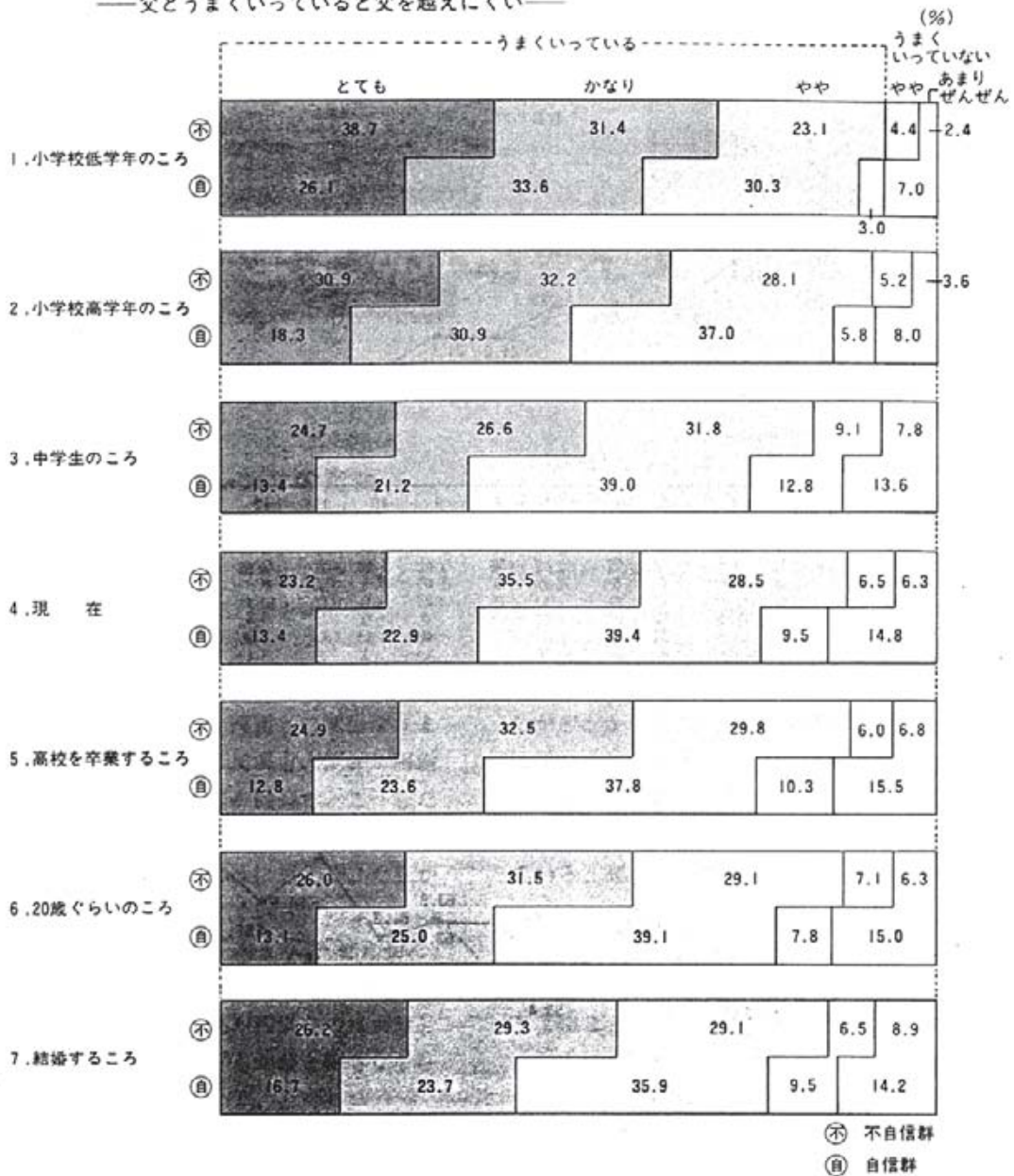


図55 子どもが父親を越えられるか×子どもと母親との関係

—父を越えないタイプは母ともうまくいっている—

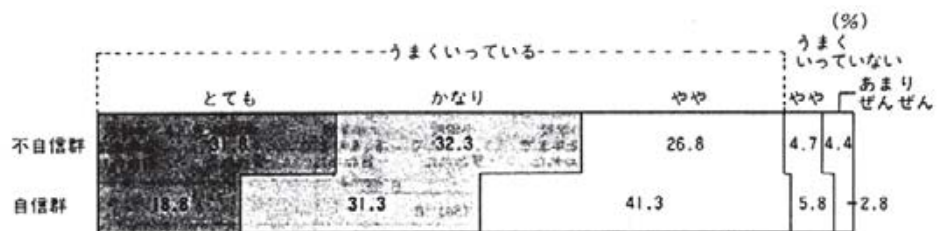
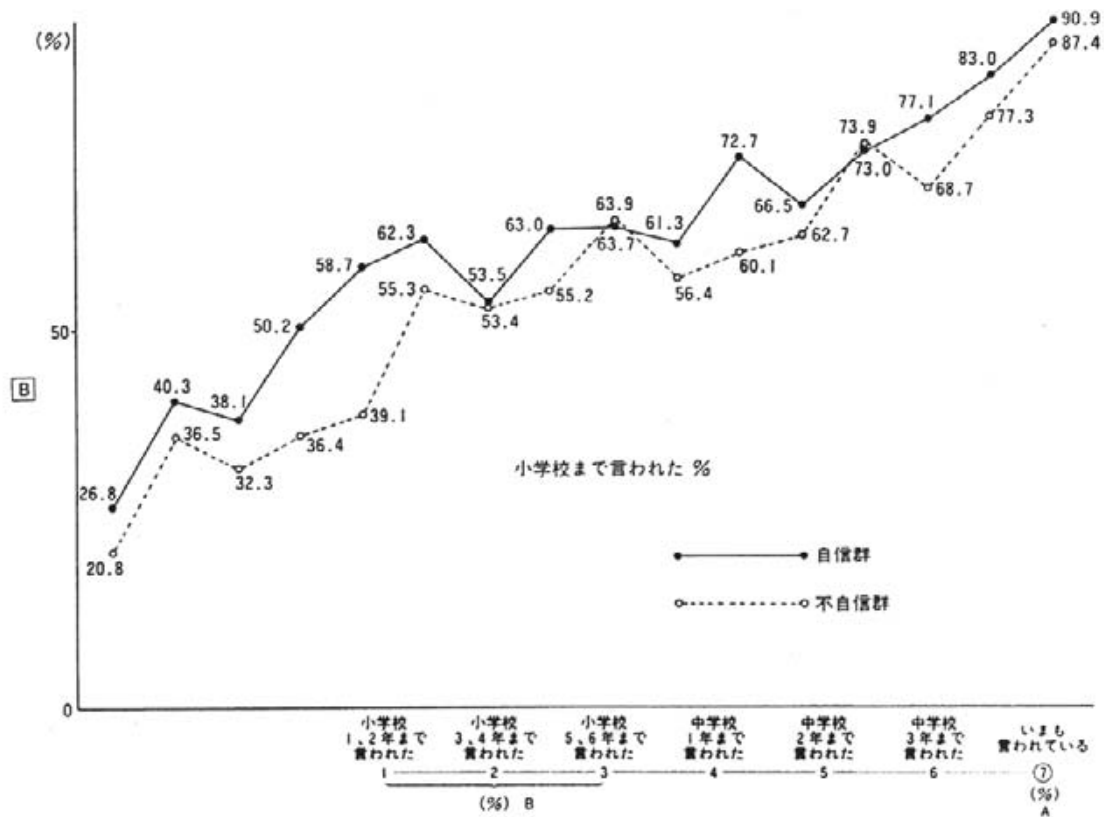
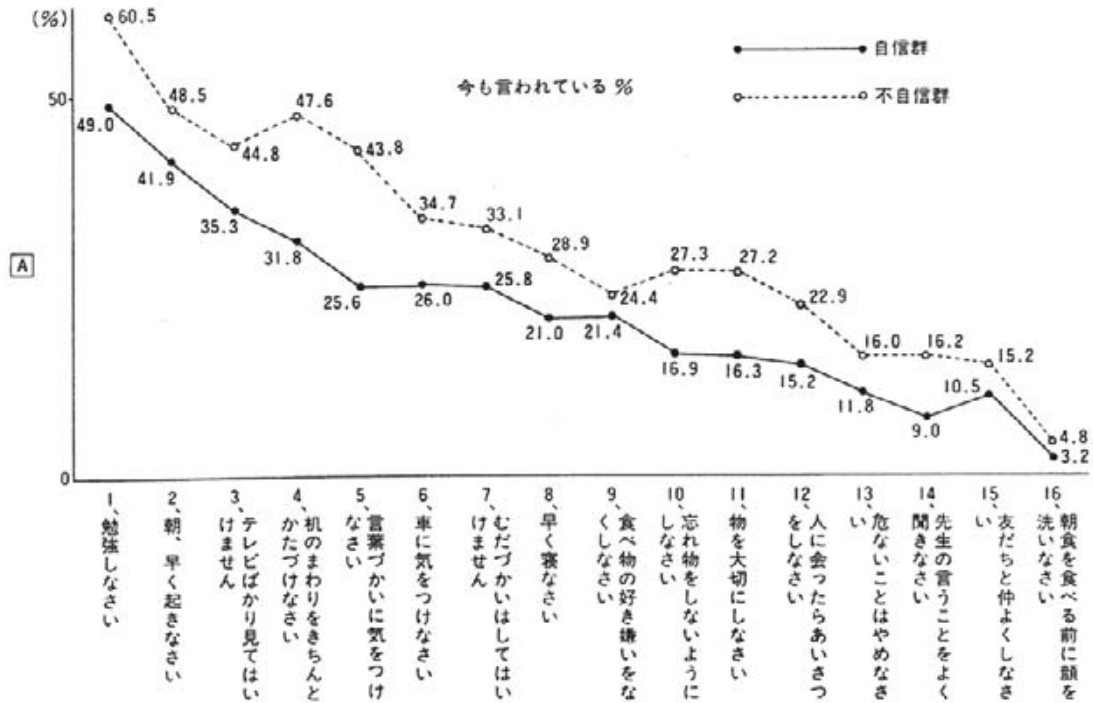


図56 子どもが父親を越えられるか×子どもが注意されていること

—父を越えられない子は今も注意されている—



まとめに代えて

(1)グレート・ペアレンツの誕生

今まで、母親と父親とに分けて、高校生の親子関係を考察してきた。この辺で、父と母とを合わせて、親子関係のまとめを行なっておこう。

表26に示したように、今回の調査結果をひとくちで要約するなら、両親との関係がうまくいっているにつきる。父親との関係が円満な子が48%、母親との間が59%で、こうした数値を手がかりとする限り、第二次反抗期の気配すら感じられないように思える。たしかに、両親との間が「うまくいっていない」と思っている子どもは、「あまり」「ぜんぜん」を合わせても、1割を下まわっている。

したがって、親子関係が円満なのは否定しがたいが、その際、①子どもが親と同等な

いに成長し、いわば、人間同士という感じで、ヨコのつながりの中で友人関係のように円満な姿を示したのか、それとも、②子どもの成長が遅れ、親と子というタテの関係を保ったまま、小学生のころからの延長として、家族の姿が持続しているのかが問題となる。

そうした意味で、すでに紹介した親を越えたかどうか重要になる。図57に、まとめて結果を示したように、子どもたちは、数学や英語の力はともかく、その他の面では、父親はむろんのこと、母親を越えていないと自覚している。高校生たちにとって、現代の親たちは「グレート・ペアレンツ」(great parent)なのであろうか。もちろん、このグレート・ペアレンツは、母性についてグレート・マザーとよぶことが多いのになぞらえている。なお、一般的に、グレート・マザーは、ファザーレス

表26 両親との関係

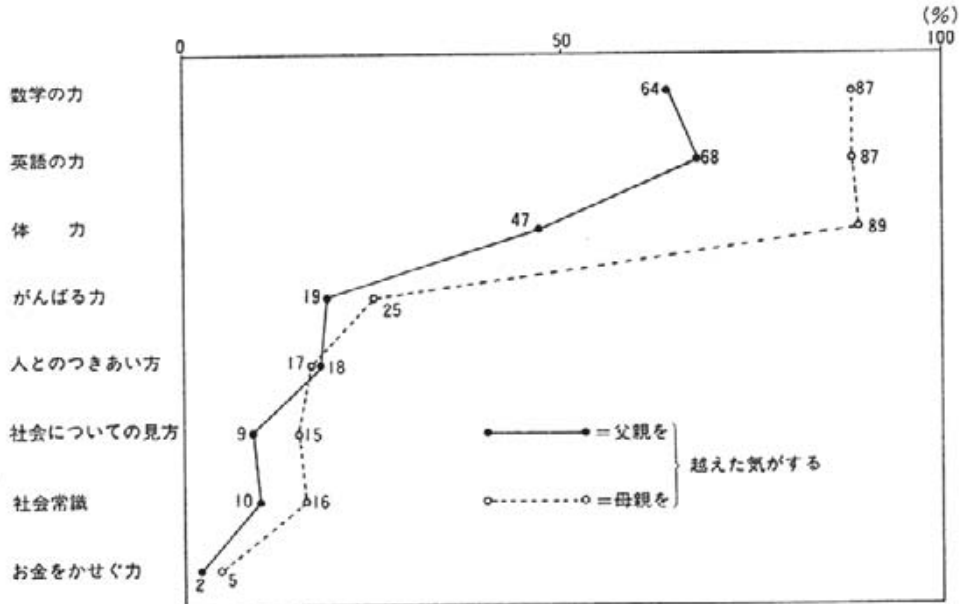
—「とても」「かなり」うまくいっているが半数—

(%)

項目	うまくいっている			うまくいっていない		
	とても	かなり	やや	やや	あまり	ぜんぜん
父親	19.0	28.8	35.7	7.4	5.7	3.4
	47.8				9.1	
母親	24.9	34.5	32.9	4.7	1.5	1.5
	59.4				3.0	

図57 両親を越えたか

——英語と数学ぐらいは越えた——



・ファザー (fatherless father) との対比の中でとらえられる。

しかし、今回のデータに即していうと、グレートかどうかは難しいところだが、母親は、子どもから権威を認められているし、それと同時に、父親も、子どもから権威を持った存在としての評価を得ている。したがって、父性の喪失とはいいがたく、全体としてみると、父親、そして母親がともに、頼もしく、かつ、やさしい理想的な親で、子どもたちからすると、反抗する気持ちが薄れるのであろう。

(2) くだらかな自立が始まる

そこで、もう一度、父親と母親についてのイメージをまとめてみると、図58の通りとなる。

- ① 父親と母親のイメージが共通しているもの
- 1 仕事熱心
 - 2 やる気がある
 - 3 健康
 - 4 頼りになる

5 心が暖かい

6 尊敬できる

② 父親のイメージが強いもの

1 スポーツ好き

③ 母親のイメージが強いもの

1 思いやりがある

2 やさしい

3 教育熱心

4 デリケート

5 口うるさい

やる気があり、頼りになり、尊敬できるなど、人間的な面では、父と母はともに共通している。そうした中で、スポーツ好きが父親で、やさしく思いやりがあるのが母親となる。

また、図58の中から数値の高い順から4位まで選んでみると、

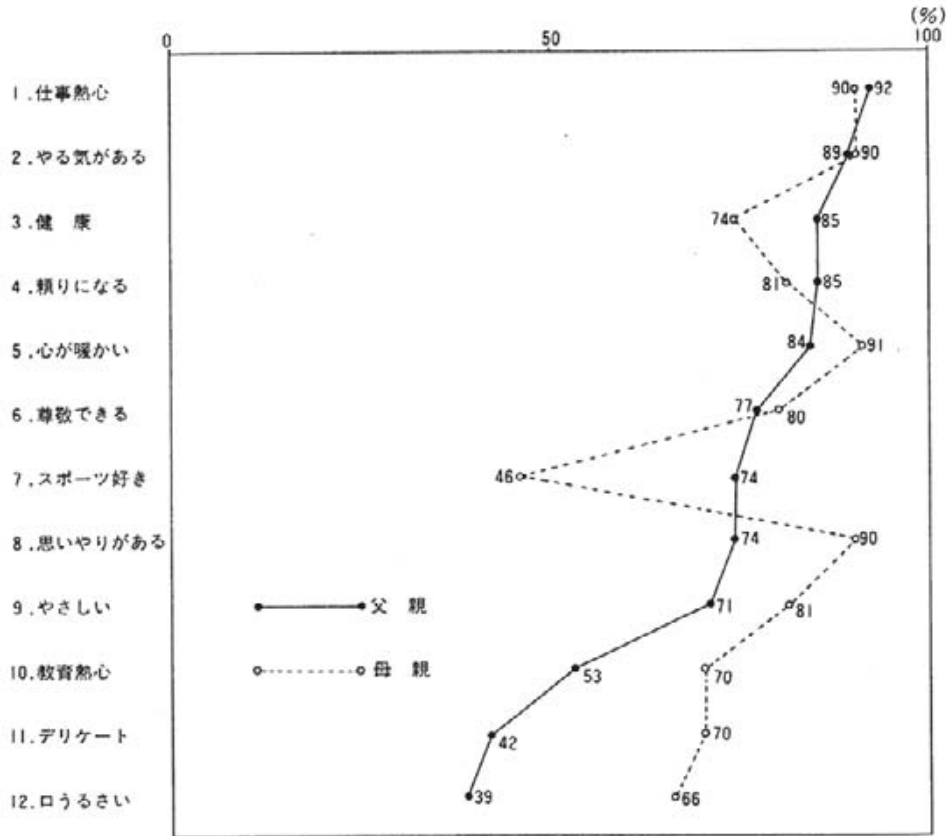
- | | |
|-----------------|----------|
| ○ 父親 = 1 仕事に熱心で | 2 やる気がある |
| 3 健康で | 4 頼りになる |
| ○ 母親 = 1 心が暖かく | 2 やる気がある |
| 3 思いやりがあり | 4 仕事熱心 |

となる。

さらに、図59によると、さすがに、学校で

図58 父親と母親のイメージ

—父はスポーツ好き、母はロウるさい—



のできごとや友だちのことなど、日常的なできごとについては、母親と話している機会が多い。したがって、現代の子どもたちも、昔の子どもほどではないにせよ、父親に頼りがいをも、そして、母親に思いやりを感じている。そして、そうした開きを認めつつ、父そして母に対して、やる気があり、尊敬できると思っているのが、現代の子どもたちなのであろう。

このように、父親、そして、母親が、子どもたちの目には、信頼できる対象のように見える。そうだとするなら、ことさら親に対し反抗を示す必要はないのかもしれない。そうみると、親に対する反抗を手がかりとして、子どもが自立するという伝統的な発達理論が崩れさっているのを感じる。

情報化社会を迎えているだけに、現代のお

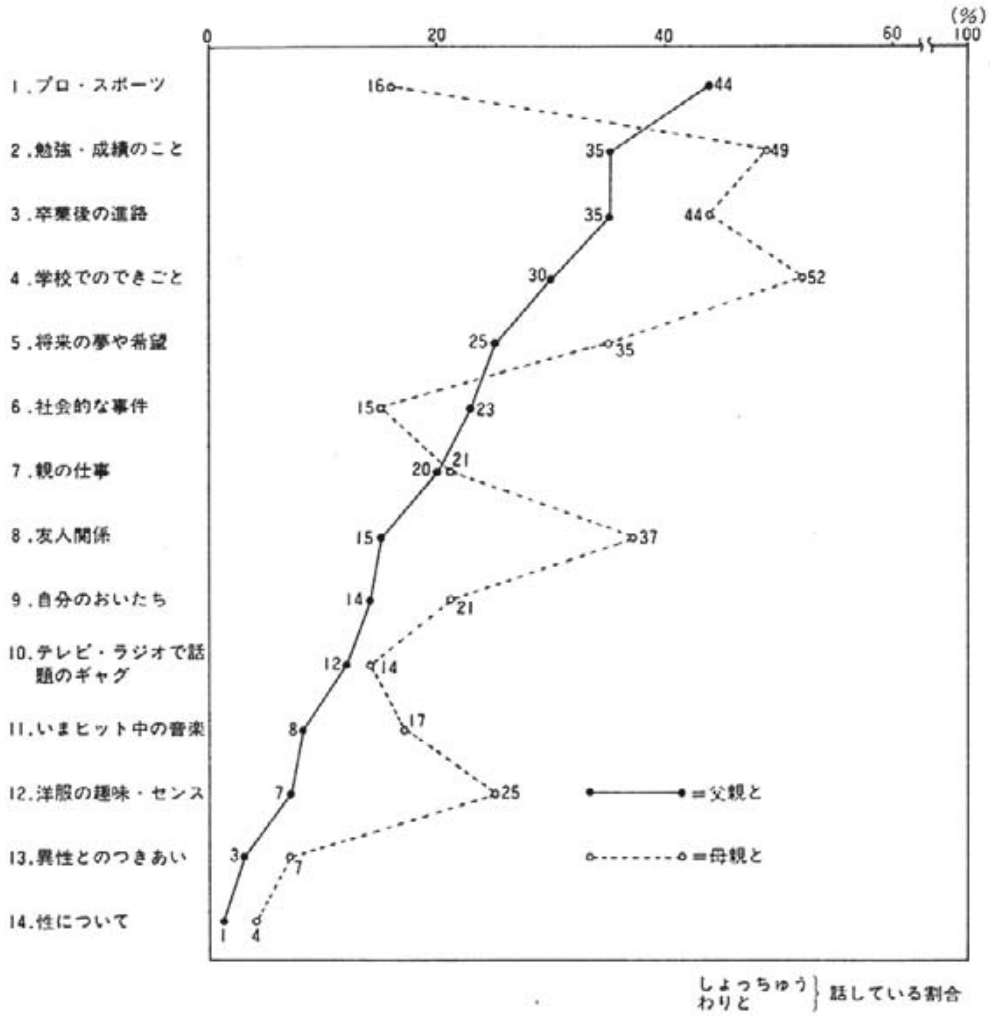
となたちは社会の進歩に遅れないように努力を重ねる。したがって、何歳になっても、成長するおとなたちである。そうした親の姿を見て、子どもたちが信頼感を持つのは、当然のことなのかもしれない。したがって、子どもたちに親に反抗しろといっても、それは無理な注文のように思えてくる。

親の庇護の許で、なだらかな形で時間をかけながら、親と対立することなしに、自立していく。そうした新しい成長のスタイルが始まったのかもしれない。自立の時間が遅れるのが気がかりになるが、これも、ひとつの成長の形なのであろう。

こうしたなだらかな成長が、子どもの人間形成にどのようなプラスとマイナスをもたらしのかが問題となるが、それは、もう少し幅広い視野からの検討を必要としよう。した

図59 両親との会話

——母親と話すことが多い——



がって、ここでは、新しい問題の提示にとどめ、考察については、別の角度から、この「モ

ノグラフ・高校生 '84」シリーズの続号でとりあげることにしたい。

*おことわり；本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。